527
16

접

5.11.27

24. 11. 7

岡本綺堂著

綺堂戲曲集

第壹卷

東京 春陽堂版

大正
13. 6. 6
内交

第一卷目次

室町御所……一
切支丹屋敷……八五
俳諧師……一二三
熊谷出陣……一五五
鳥邊山心中……二三五
名立崩れ……二六三
修禪寺物語……二九五
わが家……三二七
能因法師……三七一

527-16

室町御所

大正二年二月作。

大正二年三月。本郷座初演。

初演當時の主なる役割――足利義輝（中村又五郎）大館岩千代（市川壽美藏）岩槻主水助、笛を吹く男（市川市十郎）小侍從、蛇つかひの女（坂東秀調）松永彈正（尾上多見藏）多門（市川松蔦）一色淡路、與兵衛（市川左升）伊賀七郎（市川荒次郎）池田丹後（市川左團次）など。

登場人物――足利將軍義輝。大館岩千代。一色淡路。高木左近。畠山次郎。松永彈正久秀。池田丹後將武。岩槻主水助。伊賀七郎。森傳助。和田右京。津川源八郎。生駒甚作。落合彌市。中村五郎兵衛。魚住虎松。犬塚新吾。義輝の妾小侍從。乞食與兵衛。笛を吹く男。蛇使ひの女。松永の娘多門。足利と松永の家來。侍女。花賣の女。僧。人夫など。

第一幕

（一）

清中二條大橋の袂。舞臺の中央より上の方へよせて大橋あり。所々に柳の立木あり。正面は加茂川をへだてゝ東山をみる。足利時代の末、永祿七年五月十九日の午後。水の音やゝ高くきこゆ。

（白河の花賣女おそよ、お夏の二人、夏の花をうづたかく盛り入れたる籠を持ちて立つ）

おそよ。　この頃ふりつゞいた五月雨もどうやら晴れさうになつて來たが、かう毎日降られては、わし等の商賣は休みも同樣ぢや。

お夏。　加茂川もこの通りに水が增した。この上に降つたら溢れようも知れまい。もうよい加減に晴れてほしいものぢやなう。

（ふたりは空を仰ぐ。僧良念、小坊主良山の二人は橋を渡りて出づ。）

良山。　おゝ、あすこに花賣がゐました。なんぞ買うて戻りませうか。

良念。　なるたけ廉う値切つて買はうぞ。これ、これ、花賣。なんぞ良い花があるかな。

おそよ。　花を召してくださりませ。

良山。　買はうと思ふから呼んだのぢや。

お夏。　花はなんでもお望みのがございます。

（おそよとお夏は籠を出してみせる。）

良念。　この撫子はなんぼぢや。

おそよ。　十文でございます。

良山。　その白百合は……。

お夏。　これも同値でございます。

良念。　どれもみな高値ぢやな。錢五文ぐらゐで見事な花はないか。

おそよ。　これならばお負け申しておきませう。

良念。　いや、菖蒲ならば五文でも高いわ。ことわざにもいふ六日のあやめ。しかも今日は十九日で、節句からは半月も過ぎてゐるぞ。

良山。　先づ三文ぐらゐのところでございませうな。

お夏。　いくら時節が過ぎてゐても、三文では賣られませぬ。

おそよ。　三文花がほしければ、お寺の門へお出でなされませ。

良念。　わしが寺には一文花も賣つてゐるわ。はゝゝゝ。どうぢや、三文には負からぬか。

お夏。　ほかをたづねて御覽なされませ。

良念。　いや、愛嬌のない女子どもぢや。では、良山、行かうかの。

良山。　さあ、さあ、まゐりませう。

良念。　南無阿彌陀佛。

良山。　南無阿彌陀佛。

室町御所

（傾二人は下の方へ去る。）

おそよ。　たまに來れば素見ばかりぢや。どれ、そこらを一廻りして來ようか。

お夏。　けふは久振りで商ひに出たに、一日あるいても碌なことはないなう。

（二人の女は脚絆や草鞋の紐を結び直してゐる。武士二人は橋を渡りて出づ。）

武士甲。　公方家の御成ぢや。しばらく通行は相成らぬぞ。

おそよ。　公方様の御成でござりまするか。

武士乙。　今日は清水寺へ忍びの御參詣で、たゞいまお歸りに相成るのぢや。

武士甲。　無禮のなきやうに慎んで控へてをれ。

お夏。　かしこまりました。

（二人の女は下の方にうづくまる。足利十三代の將軍義輝、三十歳。馬にまたがりて家來に長柄の傘をさゝせ、大館岩千代、高木左近、畠山次郎等の若侍を前後にしたがへ、ほかにも家來大勢を率ゐて、橋をわたりて出づ。義輝は馬上より見かへる。）

義輝。　川を隔てゝ遠く望めば、今日この頃のさみだれに緣を增したる東山、畫を見るやうな眺めぢやなう。

岩千代。　仰せの通り、青葉わか葉の山々は、遠く隔てゝ見まするが、また一入の風情でござりまする。

左近。　今更ならねどこの三條の大橋より、川をへだてゝ東山を見ましたる風景は、都にもたぐひござりませぬ。

次郎。　たゞ惜むらくは比頃の雨つゞきで、加茂の川水が常よりも濁つてをりまする。

義輝。　なにさまこの頃の雨に水まして、加茂川の清き流れもおびたゞしく濁つた。見よ。廣き河原もあとなく隱されて、あか土を溶したやうに濁つた水が、岸を浸さんばかりに漲つてをるわ。都は山紫水明の地と謳はるゝに、山はむかしながらに青けれど、水のかばかりに濁つたは忌々しい。しかも心なき徒の仕業とみえて、川上より捨てたる破れ笠、さては古き草鞋のたぐひ、浮いつ沈みつ流れてくるわ。都名所の加茂川も、かくては路ばたの溝川も同然ぢや。

岩千代。　なにを申すもこの頃のなが雨にござりますれば、清き名をうたはるゝ京の水も、濁るばかりでござりまする。

義輝。　京の水をきよむる工夫はないか。

室町御所

左近。むかしの帝が申されましたる通り、双六の賽と加茂川の水とは、人の自由には相成りますまい。

義輝。さうかなう。

（云ひつゝ、彼の花賣女に眼をつけ、更に左右を見かへれば、家來どもは馬の口を取る。義輝は鞍より降り立ちて、更に床几にかゝる。）

義輝。あれに居るは花賣の女どもであらう。花を殘らずこれへ持て。

次郎。はつ。その花をこれへ……。

二人。はつ。

（おそよとお夏は次郎のまへに花籠をさゝぐ。）

次郎。して、この花をいかゞ遊ばしまするな。

義輝。一つの籠をこれへ……。

次郎。はつ。

（次郎は進んで一つの籠を獻ずれば、義輝は籠をみて、笑ましげにうなづく。）

義輝。百合、なでしこ、菖蒲、かきつばた、皆とりぐ〳〵に美しいものぢや。よい、よい。

左近。や、その花を川のなかへ……。

義輝。（義輝は起つて橋のほとりに行き、籠の花を取って一々に川へ投げ入れる。）加茂の川水が濁りに濁つて、汚れたる物の漂ふはあまりに目障りぢや。せめては美しい花をなげ入れて、濁れる水を彩つてくれうわ。白、紅、黄、青、むらさきの花や葉が、水をくゞつて流るゝ風情は、吉野の春か、龍田の秋か。はゝ、面白いなう。

岩千代。なにさまこれは風流の思召、水の神にも心あらば定めて嬉しう存じて居りませう。

義輝。そち達も投げてみい。

岩千代。はつ。

（岩千代、左近、次郎はほかの籠を取りて、思ひ〳〵に花を投げ入れる。）

義輝。濁れる水に色を添へ、濁れる水に香をたゞよはして、思ひもよらぬ興を催したわ。かの花賣に褒美を取らせい。

次郎。はつ。（懐中より金を取出す。）褒美を取らすぞ。ありがたく頂戴いたせ。

おそよ。恐れ入りましてござりまする。

（おそよは進んで金をうけ取り、二人は土に手をつきて拜禮す。）

左近。もはや用事は無い。行け、ゆけ。

お夏。ありがたうござりまする。

（二人の女は籠を持ちて下の方へ立去る。）

岩千代。（空を仰ぐ。）又もや空の色も怪しうなつてまゐりましたれば、降らぬうちに御歸館遊ばしては如何でござりまする。

義輝。もはや歸館いたさうか。さみだれの晴間は短いなう。

（義輝も空を仰ぎつゝ起ちあがる時、下の方より松永の家臣伊賀七郎は家來數人を引連れ、おびただしき笹の枝をつみたる車を人夫にひかせて出づ。かくと見るより岩千代はその行手に立塞がる。）

岩千代。待て、待て。公方家の御成先であるぞ。

左近。退れ。さがれ。

次郎。（進み出づ。）岩千代どの、拙者は伊賀七郎ぢや。お見おぼえもござらう。して、公方家にはいづかたへお忍びでござるな。

七郎。清水寺へ御參詣の下向でござる。

岩千代。さらば我々とは路が違ふ。邪魔せずと通してくだされい。拙者はいそぎの用事をかゝへて

ゐる身ぢや。

岩千代。そのやうにおびたゞしい笹を積んで何とするのぢや。

七郎。え。（すこしく口籠る。）宇治の螢狩にまゐるのぢや。

岩千代。螢狩にそれほどの笹が入用か。さりとは仰山なことぢやなう。（少しく怪む。）して、お身の主人松永は、何百人をつれて螢狩にゆくのぢや。

七郎。（むつとして。）いらざる詮議をする男ぢや。當時都にならびなき松永彈正どのぢや。螢狩にも何百人何千人の供をつれて行かうわ。

岩千代。それにしても松永の屋敷は立賣町ぢや。これへまゐつては方角が違ふぞ。

七郎。えゝ、それをお身に習はうか。拙者は一先づ三好殿の屋敷へまゐるのぢや。

岩千代。三好も誘うてゆくのか。

七郎。くどいなう。（顏を背ける。）なんでもよいから通して下されい。それ……。

（見かへれば、人夫は車を挽き出さんとす。）

岩千代。えゝ、ならぬと申すに……。公方家の御成先を押して通らば、この岩千代が手は見せぬぞ。

七郎。なに……。

室町御所

（七郎も太刀に手をかくれば、七郎の家來どもは駈寄りて七郎を遮る。）

岩千代。　さあ、早う路を變へて行け。この車をあとへ戻せ。

（岩千代進んで車のはなを押戻せば、人夫は餘儀なく車を引つ返す。七郎は無念に堪へず、車に積んだる笹の一枝をとりて、矢庭に岩千代の面を打つ。岩千代怒つて太刀をぬかんとするを、左近と次郎は走り寄つて支へる。七郎は猶も打たんとするを、これも家來に支へらる。）

岩千代。　おのれ。武士の面を打つたるな。左近も次郎も止むるな、放せ。

（岩千代は身をもがくを二人は猶支へる。）

七郎。　（冷笑ふ。）おゝ、打つたがなんとした。當時威勢をふるふ松永殿に對して、とかくに楯を突くが面憎さに、七郎が折檻いたしたのぢや。はゝ、公方家がなんぢや、將軍家がなんぢや。おのれ等も位倒れの主人に奉公せうより、この笹をかついで螢狩の供して來い。

（七郎は笹の枝を岩千代に投げつけて去る。家來等も車を圍みて元來し方へ引返してゆく。）

岩千代。　おのれ……。

（岩千代はいよ〳〵怒つて追はんとするを、左近と次郎は抱きすくめる。）

左近。　急くな。岩千代……。

次郎。　まあ、待ちやれ。

岩千代。　でも、このまゝには……。

義輝。　岩千代、待て。

岩千代。　はつ。

義輝。　かの七郎とか申す奴、主人松永の威勢を肩にきて、強て供先を押通るならば、たゞ一刀に切つて捨てんと、最前より痞癖を抑へて觀て居つたが、かれも道理は爭はれず、おめ〳〵と車を返して行つたわ。それでそちの役目は立つた。そのくらゐのことは堪忍せい。

岩千代。　はつ。

（岩千代は落ちたる笹を手に取りて、無念の涙をぬぐふ。）

義輝。　そちの無念は察してをるぞ。わが面前にて家來を打擲されて、義輝とても口惜いは山々ぢやが、かねて申聞かす通り、三好松永は威勢をたのんで、將軍の予に對してすらも、目にあまる振舞の多いこの頃のありさまぢや。しばらく辛抱して時節を待て。

岩千代。　はつ。上樣が御勘辨に相成りますれば、わたくしもじつと無念を堪へて、しばらく時節を相待ちまする。

室町御所

義輝。男の癖に涙をこぼすな。

岩千代。はつ。

義輝。なにや彼やで時を移した。いざ歸館いたさうか。供揃ひいたせ。

一同。はつ。

（義輝は馬にのる。左近と次郎その他の家來も附添ひて行かんとする時、上の方より松永の家臣岩槻主水助出で、かくと見るより土にひざまづきて禮す。）

義輝。かれは何者ぢやな。

左近。おなじく松永の家來岩槻主水助と申しまする。

義輝。おゝ、左樣か。（打笑む。）松永の家來も七郎のやうな無禮者ばかりでもないと見ゆるな。

（義輝をはじめ、家來等は向ふへ去る。岩千代はあとに殘りて、彼の笹の枝をじつと打ちながめ、無念の體なりしが、やがて主水助と顏を見あはせ、おのが素振を覺られまじと彼の枝を腰にはさみ、足早に向ふへ去る。主水助はあとを見送る。橋の上より松永の娘多門、十八歳、美しく粧ひて、侍女ひとりを連れて出づ。）

侍女。あれ、あすこに主水殿が……。

多門。おゝ、ほんに……。

（多門は橋を渡りて進みよる。主水助も見かへりて打笑む。）

主水助。おゝ、姫にはいづかたへお越しでござりました。

多門。清水寺へ參詣して來ました。

主水助。では、將軍家と同じところへ……。

多門。一足ちがひで、もう下向の濟んだところであつた。こゝでお身に逢うたは丁度幸ひぢや。さあ、打連れて屋敷へ戻らう。但しは嫌か。

主水助。なんで嫌でござりませう。

多門。さあ、一所におぢや。

（多門は主水助の手を取らうとするを、主水助はしづかに振拂ふ。）

主水助。都大路には人目がござりまする。

多門。ほんにうるさい世の中ぢやなう。

侍女。わたくしはおあとへ引退つてまゐりますれば、ゆるゝとお話をなされませ。

多門。おゝ、邪魔せぬやうに、あとから離れて來や。よいか。

侍女。はい。

多門。さあ、主水助。

主水助。お供いたすでござりませう。

多門。みち〳〵何を話さうか。

主水助。なんなりとも承はりまする。（打笑む。）

多門。（おなじく打笑む。）では、兎も角もあゆみながら……。

主水助。面白いお話をお聞かせくださりませ。

（多門と主水助は肩をならべて歩みゆく。侍女はすこしく引退りて從ひゆく。池田丹後將武、廿七八歳。頭巾をかぶり、笠を持ちて走り出で、橋の上にて三人のうしろ姿を屹と見送る。）

（二）

洛中立賣町、松永彈正の屋敷内。

數寄をこらせし茶室、床には畫軸をかけ、花を活け、茶棚、臺子などあり。庭には樹木數石あり。左右には風雅なる土塀あり。おなじ日の夕刻。

（茶室の内には松永彈正少弼久秀、五十餘歳。平蜘蛛といへる秘藏の釜に對して、しづかに茶を立てゝゐる。庭には蛙の聲きこゆ。）

久秀。釜には松の聲、庭には蛙の聲、さみだれの晴間に庭の青葉をながめながら、心しづかに一服の茶を啜るも、風流の極意であらうよ。（空を仰ぐ。）いや、さういふうちに空は再び陰つて來た。今宵はおそらく雨であらうな。よい、よい、ふらば降れ。夜討には雨が結句ましかも知れぬ。

（久秀は再び釜にむかふ。蛙の聲しきりにきこゆ。下の方より伊賀七郎出づ。）

七郎。殿、たゞいま戻りましてござりまする。

久秀。おゝ。七郎、戻つたか。用意の笹は取りあつめたか。

七郎。およそ三千本ばかり取集めましたが、いかゞでござりませうな。

久秀。それほど集めたら不足はあるまい。夜いくさには合印が無うてはならぬ。めい〳〵の腰に挿して、同士撃せぬやうに氣をつけよ。よいか。

七郎。一同にも屹と觸れ渡すでござりませう。右の笹を車につませて、これへ曳かせてまゐる途すがら、恰も公方家の御成にゆき逢ひました。

室町御所

久秀。いづかたへお忍びぢやな。

七郎。清水寺御参詣でござりました。

久秀。今宵かぎりで亡ぶる御運とも知らいで、佛をたのまれたとて何とならうぞ。はゝゝゝゝゝ。

七郎。大方後生を願はれたのでござりませう。

久秀。そんなことかも知れぬなう。

（娘多門出づ。）

多門。父上これにおいでなされましたか。

久秀。おゝ、よいところぢや。これへ來て相伴いたせ。

多門。はい。

（多門も父にむかひて坐す。）

久秀。七郎もどうぢやな。

七郎。はつ。お茶も結構ではござりますするが。もはや人數も到着の時刻でござりますれば……。

久秀。時刻はまだ早い。さのみ慌つるにも及ぶまい。しかし人數が揃うたれば、久秀よりあらためて申渡す儀がある。一同打連れてまゐれと云へ。

七郎。かしこまりました。

（七郎去る。）

久秀。はて、せはしない奴ぢや。娘、あらためてそちの手前を一服所望いたさうかの。

多門。では、御免くださりませ。

（多門は茶を立てる。）

久秀。久秀が人に羨まるゝ寶は二つある。その一つは先づそちぢや。年四十に近きまで子なきを憂ひ、志貴の多門天に祈誓を籠めて、はじめて儲けし娘なれば、名をそのまゝに多門と呼ばせ、けふまで恙なく成長させたが、わが子ながらも萬人にすぐれし容貌、松永の娘多門といへば、雲の上までもきこえし美人となつたわ。

多門。又してもそのやうなことを……。親の口から我子をおなぶりなされまするな。

久秀。いや、弄るでない、ほんのことぢや。今一つの寶はその平蜘蛛の釜、大明より傳へて東山殿の手に入りしを、更に傳へてわが物となつたが、これも日本には二つなき名器ぢや。その釜でそちの手前、茶の味は甘露であらうよ。

多門。とは云へ、まだそれだけでは御滿足がなりますまい。

久秀。　さあ、人間の慾には限りがないもので、おなじくは天下の權を兩手に握つて、その上でそちとその釜とを併せ有つたら、久秀の望みも初めて叶ふといふものぢや。

多門。　その御望みの叶ふのももう二晌三晌の後でござりませう。わたくしも今日は祇園と清水に參詣して、御本意成就を祈つてまゐりました。

久秀。　ほかならぬそちの願ひぢや、神も佛もさだめて納受されたであらう。陪臣の松永久秀も堅は公方家同樣の出世もなると云ふものぢや。そちも一心を凝して、父の果報を祈つてくりやれ。

（多門は茶を立てゝ出す。久秀は茶碗を取りて飲む。）

多門。　服加減いかゞでござりまするな。

久秀。　よい、よい。加減は上々ぢや。

多門。　今宵の御首尾も上々でござりませう。

久秀。　崩れかゝつた足利の家ぢや。久秀の力で一押し押したら、棟も柱もめり〳〵と折れてしまふわ。

多門。　とは云へ、上樣は武勇人に越えさせたまひ、打物取つてはその面に立つ者もないとか申しまする。

久秀。　さあ、それがいさゝか懸念ぢやが……。さりとて多勢に無勢ぢや。擊ち洩すやうなこともあるまい。

（下の方より伊賀七郎再び出づ。）

七郎。　人數はのこらず打揃うてござりまする。

久秀。　左樣か。組頭以上の者どもをこれへ呼べ。

七郎。　はつ。（下の方にむかひて。）いづれもこれへ……。

（池田丹後、岩槻主水助、森傳助、和田右京、津川源八郎、生駒甚作、落合彌市、中村五郎兵衞、魚住虎松、犬塚新吾の十人出づ。主水助をはじめ、傳助、右京、源八郎、甚作は左に、七郎、彌市、五郎兵衞、虎松、新吾等は右に、わかれ〳〵に控ふれば、丹後一人はすこしく引下りて唯ある木の下に坐す。）

久秀。　今あらためて申すまでもなけれど、公方家近ごろの御政道よろしからず、萬民ほと〳〵難儀に及びて、足利十三代の御運も將にかたむかんとす。しかも公方家は我等を殊のほかに憎ませたまひて、隙もあらば三好松永の兩家をほろぼさんと、内々の御企てもありとか聞

く。おくるゝ時は人に制せらるゝと云へり。われより先に手を下して、當公方家を失ひたてまつり、阿波の御所義綱公を迎へ取りて、更に十四代の將軍に据ゑまゐらせ、われは天下の後見となりて、家繁昌の基を開かんと思ふぞ。いづれも異存あるまいな。

主水助。　仰せまでもござりませぬ。當公方家の御政道正しからざるは萬人の知るところ、しかも當家に敵意を含ませらるゝからは、一刻も早う謀叛のおん企て然るべく存じまする。

傳助。　されば我々も密々に用意をとゝのへ、今宵戌の刻を合圖に、室町御所の四方よりみだれ入り、たゞ一戰に將軍家を攻めほろぼさんと、手ぐすね引いて相待ち居りまする。

久秀。　して、人數の配り樣は……。

右京。　先づ東の手は三好どの自身に馬をすゝめられ、人數はおよそ四百五十餘騎、三本木東の洞院に陣を立てられまする。

源八郎。　みなみは烏丸春日表より岩成主税助殿、六百餘騎にて寄せられまする。

甚作。　北は櫻の馬場、西は腹帶地藏のあたりより、味方の人數をすゝめねば相成りますまい。

久秀。　よい、よい。それで四方の隙はあるまい。久秀は室町の大門、大手口に陣を取らうぞ。

彌市。　われ〳〵は殿の左右に控へて、駈引萬端の御指圖うけたまはるでござりませう。

五郎兵衛。　御所方にも一色淡路、大館岩千代をはじめとして、宿直の武士も四五十人は屯してをりまするば、かれらも必死の働きを致すでござりませう。

虎松。　いや、いや、彼等いかばかり狂ふとも、多寡の知れたる小人數でござる。

新吾。　入替へ入れかへ攻め付けて、一人も殘さず討取るは、半晌が一晌のひまでござらう。

久秀。　待て、待て。其方どもは一人も殘さずといふ。そのうちには公方家も含まれて居らうな。

七郎。　それは勿論の儀でござりまする。

久秀。　して、その公方家は誰が擊つな。

（一同は顏を見あはせて少しく躊躇する。）

久秀。　たゞいまも申す通り、宿直の面々いかほどに働くとも、それは多寡の知れたるものぢや。が、たゞ恐るべきは公方家一人ぢや。かの御仁は力量逞しく、打物取つては御所内にもならぶものなき達人と、人も云ひ、我も誇つてをらるゝほどなれば、容易に討取ること覺束ない。さりとて狹い御所内ぢや。遠矢にかくることもなるまい。所詮は一騎討の勝負であらうが、この役目を引受くるものはないか。

七郎。　なにさまこれは大事の役目、首尾よく仕遂すれば天晴れの功名ぢやが、方々、いかゞでご

ざるな。

傳助。いかにもなう。

（一同は再び顔を見あはせる。）

久秀。今宵の企ては公方家一人を討取るが趣意ぢやに、當の相手をうち洩しては、折角の苦心も水の泡ぢやぞ。

右京。仰せ御もつともでござりまする。

久秀。進んで引受くる勇士はないか。

（一同は又もや顔をみあはせる。）

久秀。公方家の武勇がそれほどに怖ろしいか。

（一同答へず。）

久秀。將軍の威勢がそれほどにおそろしいか。

（一同なほ答へず。）

久秀。（すこしく急いて。）一旦謀叛に與しながら、公方家の武勇におそれ、威勢に恐れ、指一つ差し得ぬとは、そろひも揃うた卑怯者ぢやな。さあ、おのれ等。卑怯者と云はるゝが口惜くば、誰にもあれ、みづから進んでこの役目を引受けい。えゝ、引受くるものはないか。

（一同は又もや顔を見あはせて、たがひに譲り合ふのみ。）

久秀。（いよ〳〵激して。）返事のないは卑怯者ばかりと極まつたか。いや、いや、これほどの大事の役目を、無理強ひにすゝめたは私の不覺ぢや。重賞の下には死士ありといふ諺もある。さらば久秀が賞を懸くるぞ。こよひ室町御所に討入つて、まつさきに公方家の御首級をあげたる者には一千貫の褒美を取らせうが、どうぢや。

（一同は「一千貫、一千貫」と呟くのみにて、われ進んで應ずるもの無し。）

久秀。さらば二千貫……。二千貫ぢや。

（一同なほ答へず。）

久秀。（いよ〳〵焦れる。）さらば三千貫……。えゝ、五千貫ぢや……。えゝ、まだ不足さうな面附ぢやな。よい、よい。さらばこれを遣はす……。この平蜘蛛の釜を遣はす。これは久秀に取つて二つとない寶ぢや。それでもまだ〳〵不足と申すか。えゝ、しかと返事をいたせ。

（一同は又もや顔を見あはせて、「平蜘蛛、平蜘蛛」とさゝやき合ふのみ。）

久秀。平蜘蛛でもまだ不足とあれば、久秀の寶はもう盡きた。むゝ。

（久秀は衝と起つて娘の手をとり、多門を前にひき出す。）

久秀。今宵公方家をうち取つたるものには、この多門をくれる。いとしい娘の婿にする。

（かくと聞くより主水助は俄にすゝみ出づ。）

主水助。さらば拙者が……。

（云ひかくる時、今まで默してゐたりし池田丹後は、これを打消すやうに大音あげて叫ぶ。）

丹後。いや、それがしがお請けつかまつる。池田丹後將武がたしかにお請けいたした。

（一同おどろきて丹後の顏をみる。丹後は前にすゝみ出づ。）

主水助。いや、その儀は相成るまい。お請けの口上は拙者が先ぢやぞ。

丹後。えゝ、口上の前後は扨措いて、人には身の程といふものがある。お身等のやうな生ぬるい京侍に、この役目が勤められうか。控へておるやれ。なう、殿。武士に二言はない。今宵室町御所に討入つて、公方家の首級をあげたるものには、たしかに息女を下さるゝか。

久秀。久秀も武士ぢや。嘘はいふまい。

多門。あゝ、もし、それは……。

久秀。はて、よい、父に任しておけ。

丹後。約束に違變はござらぬな。

久秀。諸人のみる前で、久秀たしかに誓うた。

主水助。お詞ではござれども、お請けの御返事申上げたるは、丹後一人ではござりませぬ。拙者の聲はお耳に入りませぬか。

多門。ほんに丹後よりも先に、主水助がお請け申上げたのでござりまする。

久秀。さらば兩人に申付けう。丹後にもあれ、主水助にもあれ、まづ第一に公方家を討つたるものを、娘の婿と定むるほどに、いづれも懸命の働きいたせ。

七郎。まことに依怙なき御捌きでござりまする。御兩所にも其心して、たがひに功名を競はれい。

丹後。功名を競ふといふは、宇治川の佐々木梶原のやうな勇士が二人ならんだ場合に申すことぢや。

主水助。主水助では相手に足らぬと云ふか。

丹後。はゝゝゝゝゝ。

（主水助むつとして詰め寄らんとするを、傳助等は支へる。入相の鐘きこゆ。）

多門。おゝ、あの鐘は酉の刻か。

室町御所

久秀。　討入までにはもう一晌ぢや。いづれも物具の用意いたすがよからう。

一同。　はつ。

（鐘の聲つゞけてきこゆ。）

久秀。　つねに聞くあはれに換へて嬉しきは、人待つけふの入相の鐘。（と口吟む。）古歌の心も思ひ當つて、日の暮るゝのが待たれたわ。

丹後。　いま一晌が猶待たれまする。

（丹後は希望の眼をかゞやかして、打笑みながら暮れてゆく空を仰ぐ。多門と主水助は顔を見あはせる。一同たち上る。うすく雨の音きこゆ。）

——幕——

第二幕

（一）

室町の足利將軍館。白木造りにて高足の二重家體。上の方の床には鎧櫃、長刀などあり。正面は襖、左右に廊下ありて、軒には翠簾をまき上げ、よきところに燈臺を置きたり。庭の上の方には池ありて、かきつばたの花さけり。下の方は網代塀にて、所々に青葉の立木あり。前幕とおなじ夜。

（將軍義輝は茵に坐して曲彔により、愛妾小侍從、廿一二歳、その傍に侍りて酒宴の體なり。侍女楓、夕顔、卯の花、皐月の四人と小姓二人控へたり、雨の音薄くきこゆ。）

義輝。　皐月の癖とは申しながら、又もや雨を催してまゐつたな。

小侍從。　この五月雨を題にして、歌などよみ遊ばしませぬか。

義輝。　枕詞や掛詞の三十一文字にももう飽いた。何かほかに面白いことはないかなう。

小侍從。　では、いつもながら拙い舞でも御覽に入れませうか。

義輝。　舞も古うて珍らしうない。大方の遊びはもう飽いた。この上はたゞ醉うて眠るのぢや。

室町御所

小侍從。御寢なるにはまだ時刻がお早うございまする。先づお杯をお重ねなされませ。

義輝。云ふまでもないことぢや。この頃の義輝は酒が無うては一日も過されぬ。いつそ死ぬほどに醉ひたいと思うてゐるが、扨さうもならぬものぢやなう。

小侍從。この頃はあまり御疳癖が募らせまするゆゑ。少しは御酒をおすゝめ申して、お心を和げるもよからうと、淡路殿も仰せられました。

義輝。淡路が左樣に申したか。つもる不平に一時は疳癖も募つたが、今ではわしも大いに悟つた。いつの代いかなる人にも不平はあるものぢや。足利家十三代のあるじと生れて、官は征夷大將軍、位は從一位、この上の果報は又とあるまい。この上は要なき修羅を燃さずと、ただ面白く世を送るが優ぢや。先づそんなものでは無いか。

（義輝は小姓に酌をさせて飲む。）

小侍從。唯その御果報のいつまでも盡きぬやうに、お祈り申してをりまする。

（下の方の廊下づたひに、一色淡路、四十餘歳、笹の枝を持つて出づ。）

義輝。おゝ、淡路か。丁度よいところぢや。先づ飲め。（杯を献す。）

淡路。ありがたうございまするが、御酒頂戴いたしまする前に少しく言上つかまつりたき儀がございまする。

義輝。なんぢや。また例の諫言か。

淡路。御諫言ではございませぬ。先刻清水寺御參詣のみぎりに、おん供申したる大館岩千代が、かやうなものを持歸りまして、しきりに無念の涙にくれて居りまする。

義輝。おゝ、それは私も知つてゐる。岩千代はその笹の枝で、松永の家來に撲たれたのぢや。

淡路。當時威勢を振ふとは申せども、松永は三好の家來筋で、所謂陪臣でございまする。その陪臣の又家來が將軍家御側のものを、みだりに打擲して相濟みませうか。たゞこのまゝに捨置かれましては、恐れながら上の御威光にもかゝはりませうかと存じまするが……。

義輝。（突然に。）おゝ、その松永で思ひ出した。彼には多門といふ美しい娘があると申すことぢやな。

淡路。そのやうな噂も聽いてをりまする。

義輝。この小侍從に比べてはどうあらうな。

淡路。さあ、何うでございませうか。一色淡路、女子の目利きは不得手でございまする。（膠なく云ふ。）

小侍從。　妾もまだ見たことはござりませぬが、松永の娘といへば洛中にも隱れのない美人、それに比べましたら、妾風情は月の前の星よりも、果敢ないものでござりませう。（少し氣色を損じたる體にていふ。）

義輝。　はゝ、そのやうに恨みがましう申すな。どうぢや、淡路。松永の娘をわが手許へ召出す工夫はないかな。

淡路。　陪臣の分際で、やゝもすれば上を凌がんとする松永めの娘を、御寵愛遊ばす御所存でございまするか。

小侍從。　松永めは憎い奴ぢやと、日頃から仰せられるではござりませぬか。

義輝。　憎いやつなればこそ、その娘を召出さうと云ふのぢや。日ごろから申す通り、あの松永めは憎うてならぬ。折もあらば打亡ぼしてもくれうと存ずれども、今の義輝には彼を仆すほどの力がない。されど彼は筋目もない賤しいものぢや。われには征夷大將軍源氏の棟梁といふ世にならびなき名譽がある。この名譽を餌にして、かれの娘を所望と申さば、松永もおそらく喜んで承引するであらう。かくして娘を差出したら、思ふがまゝに弄り物にして、息の絶ゆるほどに追ひ遣うてくれるわ。親の因果が子に報うとか申すはこの事で、それが松永めに對する切めてもの意趣晴しぢや。

淡路。　親を憎ませたまふがために、罪なき娘に祟らせらるゝは、あまりに御卑怯かとも存じまするが……。

義輝。　卑怯ぢやとて是非がないわ。かれは力があつて名がない。我は名があつて力がない。彼は力をたのんで、常にわれを苦むるほどに、われは名を以てかれを誘ふよりほかはあるまい。弓を善くするものは弓を以て鬪ひ、槍を善くするものは槍を以て防ぐが自然の習ぢや。

淡路。　でもござりませうが、この儀ばかりは……。

義輝。　ならぬと申すか。

小侍從。　松永めの娘などと一所に御奉公はなりかねまする。萬一いよ〳〵御召出しと相成りますれば、妾はお暇たまはりまするほどに、左樣思召してくださりませ。

義輝。　まだ判らぬか。頑固な奴等ぢやなう。

（雨の音強くきこゆ。侍女は空を見る。）

楓。　おゝ、又ひとしきり強く降つてまゐりました。

夕顔。　今夜も降通すのでござりませうか。

室町御所

卯の花。　この頃の雨にも飽々しましたなう。

皐　月。　あまりに飛沫が強うござりますれば、しばらく翠簾をおろしませうか。

義　輝。　いや、ひとしきりで又やむであらう。垂れ籠めては鬱陶しいものぢや。そのまゝに致しておけ。

皐　月。　はあ。

（蛙の聲高くきこゆ。）

義　輝。　池の蛙がしきりに鳴くなう。

淡　路。　雨の強く降るときには、鳴きやむが習でござりまするに……。

小侍從。　却つて高く鳴き立つるは……。不思議なことでござりまするな。

（蛙はしきりに鳴く。）

義　輝。　えゝ、さわがしい奴ぢや。雨夜の蛙もかやうに鳴き立てゝは無風流の極みぢや。やあ、女共。あまたの松明を池のほとりに照らして、蛙の鳴く音を一時にとゞめよ。

楓。　心得ました。

（侍女四人は奥に入る。）

小侍從。　蛙の鳴く音が左までにお耳に障りましたか。

義　輝。　おゝ、耳障りぢやよ。館のそとへ一足踏み出せば、三好や松永の奴原がさま〳〵の邪魔をしをつて、何事も義輝の自由にはさせぬ。せめて館にあるあひだは、思ふがまゝに振舞はねば、世に生きてゐる甲斐がないぞ。えゝ、蛙めがまた鳴くわ。燈火を早う持て。

（高聲によび立つれば、はつと答へて下の方より楓等四人の侍女は、片手に竹笠を持ち、片手に松明を持ちて出づ。）

淡　路。　この雨のなかを御役目大儀ぢやが、上の御意とて是非もござらぬ。手に〳〵松明をふり照して、池のあたりを一巡りせられい。

四　人。　かしこまりました。

（侍女どもは松明を振りながら池のほとりに進みゆく。）

楓。　幸ひに雨も小降りになりました。

義　輝。　火を消さぬやうに氣をつけてゆけ。

四　人。　はあ。

（侍女どもは松明の火を水にうつす。蛙の聲は次第に止む。）

小侍從。　松明の火におどろかされて、蛙も次第に鳴きやみました。

義輝。　かれらも火におどろいて一旦は音を止めたが、暗とならばやがてまた鳴くであらう。やかましく鳴き立てられては眠りの邪魔になる。女どもは火を持つて、夜もすがら池のめぐりを張番いたせ。

四人。　はあ。

淡路。　これはいよ〳〵難儀のお役ぢや。御小姓衆と一晌交代で、御用を勤めたがようござらう。

小姓。　心得ました。

（雨の音又もや強くきこゆ。）

小侍從。　おゝ、また強く降つてまゐりました。

（侍女どもはあわてゝ竹笠にて松明の火を掩ふ。）

義輝。　よく降ることぢや。淡路、雨をやむる工夫はないか。

淡路。　これは思ひも寄らぬこと。人間の力では及びませぬ。

義輝。　人間の力に及ばぬことが多いなう。

（義輝は忌々しげに嘆息す。雨の音にまじりて貝鐘の音遠くきこゆ。）

小侍從。　や、あの聲は……。

（淡路は衝と起ちて緣先に出で、貝鐘の音に耳をかたむく。）

義輝。　夜陰に及んで俄にきこゆる貝鐘のひゞきは……。淡路、其方はなんと思ふぞ。

淡路。　東の洞院、烏丸、櫻の馬場、四方にきこゆる貝鐘が次第にこなたへ近づくは……。殿、一大事でござりまするぞ。

義輝。　むゝ、謀叛人がこゝへ寄するといふか。

小侍從。　敵は何者でござりませうな。

淡路。　察するところ、三好か松永……。いよ〳〵謀叛を企てたか。

（貝鐘の音いよ〳〵烈しく、大館岩千代、簑笠にて走り出づ。）

岩千代。　常はさびしき雨の夜に、大路小路の物さわがしきは、合點ゆかずと物見にまゐれば、幾千の人馬は四方に屯して、御所を目がけて押寄せまする。

義輝。　して、旗の紋所は……。

岩千代。　大手は正しく松永彈正、からめ手は三好の一黨と見申した。

義輝。　扨はいよ〳〵案に違はず。（首肯く。）やあ、淡路。其方は宿直の者どもを呼びあつめて、防

ぎ矢射よと申傳へい。

淡　路。　はつ。

（淡路は緣づたひにて、下の方へ走り入る。）

小侍從。　日頃より威勢をたのんで、上をないがしろにするのみか、果は謀叛をたくむとは、云はうやうない人非人どもでござりまするな。

義　輝。　それは今更いふも詮ない。三好松永が合體して、謀叛を企てしとあるからは、足利の家も十三代の今日で亡ぶるわ。

岩千代。　殘念な儀でござりまする。

義　輝。　義輝も征夷大將軍の名をたのんで、僅にみづから慰めて居つたが、今となつては名もいらぬ、位もいらぬ。たゞおのれの力を恃むのみぢや。いでや最後の力を揮つて、謀叛人どもを蹈みにじつてくれうぞ。

岩千代。　われ〳〵も力のかぎり鬪うて、冥途のおん供仕つりませう。それ、侍女衆。最後の御酒宴の御用意あれ。

四　人。　はあ。

（侍女どもは内に入りて座につく。）

義　輝。　岩千代、近う。

岩千代。　はつ。

（岩千代は緣先近くすゝみ出でてひざまづけば、義輝は小姓を見かへる。）

義　輝。　その笹の枝をこれへ……。

小　姓。　はつ。

（小姓の一人は淡路がすて置きたる笹の枝を持ち來る。義輝は手に取る。）

義　輝。　岩千代。これは今日の夕刻、清水寺參詣のみぎりに、松永の家來めが其方を打つたる枝ぢや。無念はさだめて覺えがあらう。

岩千代。　はつ。

義　輝。　今にして思へば彼の笹は、螢狩などに用ゆるものではない。今宵夜討の合印と推量したぞ。ついては其方物具に身をかためて、この枝を腰にはさみ、敵の陣中へまぎれ入つて、謀叛の頭領松永めを唯一刀に打つて捨て、主の鬱憤、その身の仇、一度に報ゆる所存はないか。

岩千代。　よくぞお心が付かれました。夜中と申し、亂軍の折柄、その合印を身につけましたら、敵

もうたがふ氣遣ひはござりませぬ、首尾よく松永めに近寄つて、君に代つて謀叛人の成敗、屹と仕つるでござりませう。

義輝。しかと賴んだぞよ。

岩千代。はつ。

（義輝は緣先にすゝみ出る。岩千代は伸び上りて笹の枝をうけ取り、たがひに顏を見あはせる。貝鐘の音又もやきこゆ。）

小侍從。おゝ、敵はいよ〳〵寄するとみえて、夜をさわがす人馬の物音が、手に取るやうに聞えまする。

義輝。岩千代、早うゆけ。

岩千代。首尾よく御川を勤めてからが、とても逃れぬ我が命……。あすは再び冥途で見參……。

義輝。いや、そちはなるべく身を全うして、二度が三度でも執念く仇をねらへ。

岩千代。はつ。

（下の方の緣づたひに一色淡路、武裝して弓矢をたづさへ出づ。）

淡路。殿、敵はもはや御門前まで押寄せ申した。宿直の面々は、上野兵部、結城主膳、高木左近、畠山次郎、引詰め引きつめ射るほどに、矢面に立つたる敵二十餘人は、見る〳〵うちに倒れましたわ。

小侍從。とは云へ、敵は大勢なれば、とても最後の御勝利は……。

義輝。それは云ふまでもないことぢや。義輝も最期の用意をせうぞ。岩千代もゆけ、ゆけ。

岩千代。然らば御免くださりませう。

（岩千代は笹の枝を持ちて、下の方へ走り入る。貝鐘の聲絶えずきこゆ。義輝は杯を取る。）

義輝。わかれの酒ぢや。酌いたせ。

小侍從。はあ。

（小侍從進んで酌をする。義輝はかたむけ盡して、小侍從に献す。）

小侍從。ありがたうござりまする。

（小姓に酌をさせて、小侍從は飲む。）

義輝。その杯は淡路にまはせ。

淡路。はつ。ありがたく頂戴いたしまする。

（淡路も杯をうけ、小姓の酌にて飲む。）

淡路。　おそれながら御返杯……。
（義輝は小姓に酌をさせて飲み、その杯を縁にうち付けて割る。）
義輝。　われも碎けて土となるのぢや。長刀持て。
小姓。　はあ。
（小姓は床より長刀を持ち來る。）
義輝。　義輝が最後の働きをみよ。すくなくも二十人三十人は薙ぎ伏せてくれうわ。
（義輝は長刀をかい込んで起つ。小侍從は起つて鎧櫃より緋縅の鎧を把出す。）
小侍從。　上樣には先づおん着長を……。
義輝。　（打笑む。）お身は足利の家風を知らぬか。主が家來を征伐するときには、鎧をつけぬが源氏の習ぢや。
小侍從。　とは云へ、不意の夜討にござりますれば……。
義輝。　いや、堀河の義經は眞似たうないわ。
小侍從。　はあ。
（小侍從は鎧をかたよせる。空にほとゝぎすの聲きこゆ。義輝は聲する方を打仰ぐ。）
義輝。　死出の田長が五月の闇を鳴いて通るわ。義輝が最期に一首殘さう。料紙を持て。
小姓。　はあ。
（小姓起たんとすれば、貝鐘の音はげしく聞ゆ。）
淡路。　敵はいよ〳〵迫つてまゐつた。さ、早う、早う。
小侍從。　では、いつそ料紙の代りに……。
（小侍從は懷劍をぬきて、わが白き袖を切る。）
義輝。　おゝ、よい、よい。さらば硯も紙も要らぬぞ。
（義輝はわが指を咬み、その血汐を袖に染めて辭世の歌をかく。）
義輝。　辭世の一首、見てくりやれ。
（小侍從は袖を受取り、淡路ものぞきて見る。）
小侍從。　さみだれか露か涙か時鳥……。
義輝。　わが名をあげよ雲の上まで。
（高らかに吟じて空を仰ぐ。ほとゝぎすの聲きこゆ。高木左近、畠山次郎、大童にて太刀をぬき持ち、下の方より走り出づ。）

左近。　上様、これに御座ありしか。宿直の面々必死となつて防げども、矢種のこらず射盡して、敵は御門前まで犇々と寄せ申した。

次郎。　双方手詰のたゝかひと相成つては、なにを申すも敵は目にあまる大勢、おそれながら御運も最早これまでかと存じまする。

義輝。　よい、よい。ついては寶藏に秘め置きたる金銀はいふに及ばず、鎧、太刀、兜、さては綾錦のたぐひまで、ことぐくこれへ運び出して、むらがる敵のなかへ投げ入れよ。慾に眼がくれたる敵の奴原、われ先にと爭つて拾はんとするところを、片端より薙ぎ伏せ斬倒してくれうぞ。これも最後の一興であらうよ。

淡路。　なにさまこれは面白き御思案。とても敵の手に渡すものならば、かうして弄るも一興でござらう。それ、方々……。

（小姓と侍女等を見かへれば、一同心得て奥に入る。）

義輝。　さらばいよ〳〵最後のいくさぢや。いづれも支度いたせ。

一同。　はあ。

義輝。　先づ庭さきに篝を焚け。夜を晝にして闘はうぞ。

（貝鐘の音はげしくきこゆ。）

（二）

おなじく館の門前、築地の外には幾株の柳をうゑたり。

（松永彈正久秀、陣羽織を着て床几にかゝり、兜を持ちたる家來一人これに從ふ。ほかにも松明または槍を持ちたる家來十數人控へたり。いづれも腰に笹の枝をはさむ。）

久秀。　敵の矢種も大方は盡きたであらう。いよ〳〵これからが手づめの勝負ぢや。小勢ながらも敵は必死に闘うて、容易に埒があかぬと見ゆる。誰かある、門内の樣子を見てまゐれ。

家來一。　はあ。

（家來の一人は門内に走り入る。貝鐘の音はげしくきこゆ。森傳助、和田右京、大童に鉢巻して鎧をつけ、揷物を背負ひて腰に笹の枝をはさみ、槍を持ちて走り出で、久秀のまへに一禮す。）

傳助。　森傳助。

右京。　和田右京。

傳助。　これより討つて入りまする。

室町御所

久秀。　（云ひ捨て、門内へ走り入らんとするを、久秀は呼び止める。）
　　えゝ、おのれ等は武士にも似合はぬ。夜討の作法を知らぬ奴な。面も確とはみえぬ夜いくさに名を名乗ればとて何とならうぞ。鎧の縅の色、旗さし物、一々に名乗つて通れ。
二人。　はつ。（引返してくる。）
傳助。　森傳助は萠黄縅、挿物は不動明王……。
右京。　和田右京は紺絲縅、さし物は墨にて和田右京照正と記してござる。
久秀。　一々見知つた。ゆけ、ゆけ。
二人。　御免
　　（二人は門内に走り入る。）
久秀。　池田丹後、岩槻主水はまだみえぬか。
家來。　はあ。
久秀。　彼のふたりは如何いたしたのかなう。矢軍のすんだる頃を見計らうて駈付くる所存であらうな。
　　（伊賀七郎、門内より走り出づ。）
七郎。　殿。敵は思ひのほかに手剛うござりまするぞ。
久秀。　窮鼠猫を食むの例ぢや、さもあらうよ。
七郎。　中門口までは寄せましたれど、容易に奥へは踏み込まれませぬ。
久秀。　敵とても鬼神ではない、いま一晌の後には自然に疲るゝわ。
　　（門内より大館岩千代、鎧をきて腰に彼の笹の枝をはさみ、みだれたる髪を顔にふりかけて出づ。）
岩千代。　大將はいづれにござるな。
七郎。　誰ぢや。
岩千代。　味方の者、合印を御覽くだされ。
久秀。　むゝ、久秀はこれにあるぞ。
岩千代。　おゝ、これにござりましたか。密々にて申上げたき儀が……。
久秀。　なにか知らぬが近う寄れ。
岩千代。　はつ。
　　（岩千代つか〳〵と寄らんとするを、七郎はあわてゝ遮る。）
七郎。　待て、待て。聞きおぼえのある聲音と思ひしに、おのれは正しく大館岩千代……。

岩千代。　や。

七郎。　殿、御油斷あるな。

（家來どもは松明をさしつけて取圍む。岩千代は早やこれまでと覺悟して叫ぶ。）

岩千代。　謀叛人の松永め。

（跳りかゝつて斬付けんとすれど、家來どもに隔てられて果さず。岩千代は齒がみをなして奮闘。遂に敵と闘ひながら下の方へ去る。久秀とその兜を持ちたる家來一人、ほかに七郎のみが後に殘る。）

七郎。　敵は死物狂ひでござりますれば、岩千代のごとき不敵者が又もやあらはれ出でぬとも限りませぬ。こゝに御座あつては、大事のおん身にいかなる過失があらうも知れますまい。一旦はあれまで引退つて、ゆる〳〵御見物なされては如何。

久秀。　さらば一先づ引揚げるといたさうか。七郎、まゐれ。

七郎。　はあ。

（七郎は先に立ち、久秀は家來を引連れて、上の方へあゆみ去る。門内より高木左近、畠山次郎は敵の軍兵數人とたゝかひながら出づ。兩人奮闘。左近は敵とたゝかひつゝ門内に退き、次郎は敵を追うて上の方へ走り去る。雨の音又きこゆ。池田丹後、よろひの腰に笹の枝をはさみ、片手に松明、かた手に槍を持ちて出づ。）

丹後。　これほど手詰のいくさになつても、公方家の武勇に恐れ、二つには公方家といふ名に怖ぢて、誰一人進んで將軍に手ざしをする者もあるまい。……もしやあの主水めが……。なんの、小二才が……。われ等の先を越さうなどとは及ばぬことぢや。

（丹後は松明を地に投げすてゝ、蹈み消し、槍を取直して門内へ大股にすゝみ入る。下の方より大館岩千代は岩槻主水助と闘ひながら出づ。）

主水助。　えゝ、おのれらの首に望みはない。邪魔せずと通せ、通せ。

岩千代。　謀叛人の片われ、一人たりとも通さうか。

主水助。　なにを……。

（兩人はげしく闘ふうちに、下の方より松永の家來數人出づ。）

主水助。　われ等はほかに目ざす敵がある。こゝ賴んだぞ。

（云ひすてゝ主水助は門内に走り入る。岩千代追はんとするを、家來どもは遮りて闘ふ。雨の音いよ〳〵烈し。）

室町御所

（三）

もとの館に戻る。庭前には所々にかゞりを焚きて、鎧、金銀珠玉の細工物、諸道具、女の衣類など内にも外にも散亂せり。

（小侍從は引立烏帽子に紅梅の鉢まきして、長刀を持ち、おなじく白鉢巻の侍女四人、いづれも長刀を持ちて居ならべり。）

小侍從。　館の八方を取切られし上は女わらべとて逃るゝ途はあるまい。まさかの時には奥殿に火をかけて、一同いさぎよく相果つる覺悟ぢや。先づそれまではこゝを守護して、敵一人も奥へは通すまいぞ。

楓。　仰せまでもござりませぬ。わたくし共も武家に御奉公いたすからは、まさかの時には覺悟がござりまする。

夕顔。　謀叛人共これへ亂入いたさば、片端より薙ぎ倒して、最後の働きつかまつるでござりませう。

小侍從。　女とあなどつて無禮を働かば、何奴なりとも容赦すな。して、御門口の樣子はどうぢや。

卯の花。　宿直の面々こゝを先途と闘うてをりますれば、敵も容易にはふみ込まれますまい。

皐月。　せめて夜の明くるまで支へられましたら、思ひもよらぬ加勢のまゐらぬとも限りませぬ。

小侍從。　いや、いや、亡ぶるものに加勢はあるまい。あてもないことは頼まぬがよいぞ。

四人。　はあ。

（義輝は長刀を掻い込みて奥より出づ。）

義輝。　どうぢや、岩千代よりなんのたよりもないか。

小侍從。　一向にうけたゝはりませぬ。

義輝。　松永めも用心ぶかい奴、迂濶に近づくこともなるまい。大方は仕損じて討たれたかなう。

（貝鐘の解烈しくきこゆ。）

義輝。　宿直の者共いかばかりに猛くとも、味方の人數には限りがある。今は義輝のほろぶる時節となつた。そち達は奥へまゐつて、最期の支度いたせ。

小侍從。　今にも謀叛人が寄せてまゐらば、及ばずながら我々も……。

義輝。　いや、いや、義輝が最後のいくさに女子どもの加勢は頼まぬ。獣のやうな奴ばらの眼に觸れて、由なき恥辱を受けぬうちに、そち達は奥へゆけ。早う行け。

一同。　はあ。

（小侍從をはじめ侍女四人は奥に入る。蛙の聲きこゆ。）

義輝。　蛙めが又鳴くわ。この上は鳴きたいだけ勝手になけ。思へばそちたちは仕合者ぢや。この館にすむ人間は、今宵の中にほろび盡して、夏草しける空屋敷のうちは。そち達が自由な住家となるのぢや。

（義輝さびしく笑ふ。下の方の木かげより池田丹後、槍を襁へてうかゞひ出づ。義輝屹と見かへる。）

義輝。　誰ぢや。

丹後。　名乘ればとて御存じのないものでござる。

義輝。　扨はおのれも謀叛人な。

丹後。　お身樣の御首級を頂戴にまゐつた。

義輝。　下郎め、推參……。退れ。すされ。

丹後。　はゝ、下郎も上臈も、こゝまでせり迫めたら一人とひとりぢや。おのれの力を恃むよりほかはござらぬ。いざ尋常に御覺悟あれ。

義輝。　えゝ、義輝に鬪ふほどの力がないと思ふか。おのれ等の五人三人、瞬くひまに斬つて捨つるわ。

丹後。　御手並拜見……。

義輝。　まゐれ。

丹後。　御免。

（丹後は槍を把つて突いてかゝる。義輝は太刀をぬきて鬪ふ。双方飛鳥のごとく飛びちがへて働けども、勝負は容易に決せず。二人は鬪ひつゝ緣にあがり、打物をすてゝ組討となり、丹後は押されてうしろの襖を倒しつゝ、折かさなつて轉びしが、更に跳れかへして今度は義輝をくみ伏せる。そのはずみに次の襖を押破り、ふすまの骨にて丹後は兩眼を傷つく。しかも押へたる手をゆるめず、義輝を膝下に敷きたるまゝ、短刀をぬいてその胸を刺す。義輝蹶る。丹後はほゞと息をつき、鎧の引合せより紙を取出して、兩眼より溢るゝ血をぬぐへども、血は流れやまず、這ひ起きんとしてつまづき倒る。）

丹後。　おゝ、この眼が……。あたりが俄に闇となつた。見えぬ……見えぬ……右も左もみえぬ……。おゝ、おゝ。（探りながらに起たんとして又倒る。）それにしても大事の證據ぢや。將軍の首を……。

室町御所

（這ひまはりて義輝の死骸をさぐり求む。雨の音きこゆ。若槻主水助、下の方より走り出でこの體を見ておどろく。）

主水助。　丹後でないか。

丹　後。　（耳をかたむけて。）主水助か。

主水助。　して、將軍は……。

丹　後。　丹後がみごとに仕留めたわ。

（主水助いよ〳〵おどろきて緣に駈けあがる。）

主水助。　え、、無念ぢや。お身に先を越されたか。（云ひつゝ、丹後の顏を透しみる。）お身の顏にはおびたゞしい血が……。向疵でも負うたのか。

丹　後。　相手と引組んで倒るゝはずみに、槻の骨で左右の眼を突き破つたのぢや。

主水助。　むゝ。では、俄に盲目となつたか。

丹　後。　おゝ、俄盲目ぢや。聲は聞けどもお身のすがたは見えぬ。

主水助。　それは難儀であらうなう。

（主水助少しく思案す。丹後も思案する。）

丹　後。　主水、お身に賴みがある。

主水助。　なんぢや。

丹　後。　上帶を解いて、わしの眼をくゝつて吳りやれ。

主水助。　むゝ。

（何心なく進みよるを、丹後は矢庭に取つて捻ぢ伏せ、短刀にてその脇腹を突く。主水助は悲鳴をあげて死す。丹後はさびしく打笑ふ。）

丹　後。　眼を失うたは我が不運。あはせて彼の不運であつた。

（丹後はやがて再び義輝の死骸を探りてその首を擊ち、義輝の衣を裂きて押包み、小脇にかゝへて四邊を探りまはれば、落ちたる槍が手さきに觸る。丹後はこれを杖にして探りながら歩み出でんとし、よろめきながら緣を降りゆく。雨の音烈し。）

――幕――

第三幕

淀川堤の中腹。舞臺の正面は少しくあとへ下げて小高き堤をつくり、花道の方よりのぼるべき通路あり。堤には柳の立木つらなりて、そのうしろには淀川の流れを見る。堤の中腹には約三人を容るるに足るべき小屋ありて三方に荒むしろを垂れたり。小屋のまへは堤下の通路にて、あたりには芒などの秋草おひ茂れり。前の幕とおなじ年の九月の末。

（笛を吹く男、乞食のすがたにて小屋のまへの切株に腰をかけ、餘念もなく笛を吹いてゐる。小屋の筵をあげて、蛇つかひの女が聲をかける。）

女。　おい。お前さんもさつきから根好くぴい〳〵吹いてゐるね。子供ぢやあるまいし、好加減にしたらどうだえ。

（男は平氣で吹いてゐる。女はじれつたさうに舌打しながら小屋を出で來る。若き女にて手首には蛇をまいてゐる。）

女。　おい、好加減におよしと云ふのに……。さう〳〵しいよ。

（男はやう〳〵振向く。）

男。　でも、これがおいらの商賣だからな。

女。　商賣ならば往來のあるところへ行つてお吹きな。こんな堤の下で幾ら吹いてゐたつて、上から誰も錢を投つてくれる人はありやしないよ。

男。　それもさうだな。けれども、畢竟は道樂からこんな身の上になつたのだから、かうして吹いてゐるうちは、なんだか氣が清々するよ。

女。　つまらない道樂があつたものさねえ。笛が好きならば伶人にでもなればいゝのに、乞食になるとはあんまり道樂が強すぎるねえ。

男。　いや、窮屈なことは俺あ嫌ひだ。乞食をして好きな笛をふいてゐる方が氣樂で可い。

女。　ところが、この頃はあんまり氣樂でもないよ。先月からあんな變な奴が仲間に這入つて來たので、毎日喧嘩が絶えやあしない。與兵衛のおぢいさんも何だつてあんな奴を引摺り込んで來たんだらうねえ。

男。　なんでも元は立派な武士だと云ふぢやあないか。

女。　いくら立派な武士でも大名でも、一旦こつちの小屋へ落ちてしまへば、やつぱり同じ仲間ぢやないか。むかしの身分を嵩に被て、武士風を吹かされて堪るものか。あんな奴はどう

男。　かして追つ攘つてしまひたいね。

追つ攘はうと思つても、あいつはなか〳〵出て行きさうもないぜ。目は潰れてゐても強情らしい男だからな。

女。　盲の癖に威張つてゐるから、猶更のこと憎らしいよ。

男。　まあ、そんなに憤ることもない。むかうで出て行かなければ、こつちで立去る分のことさ。

女。　お前さん、どつちの方へ行くつもりだえ。

男。　どつちといふ的もない。この笛を吹きながら、西へでも東へでも勝手にぶら〳〵と行くのさ。

女。　もしさうなつたら、あたしも一所に連れて行つておくれな。

男。　おいらと一所に行く……。

女。　さうさ。いくら乞食をしてゐたつて、あたしも若い女だもの。若い男と一緒に暮してゐる方がいゝやね。

男。　いや、御免だ。おいらにはこの笛といふ友達がある。お前にはその蛇といふ友達がある。おたがひに分れ〳〵になつても寂しいことはないよ。

女。　でも、話相手がないぢやないか。

男。　話相手なんぞは寧そない方が可い。話相手があればこそ喧嘩相手も出來るのだ。ひとり法師の方が氣樂でいゝね。

女。　おまへさんも隨分變り者だねえ。

（堤の上より大笛岩千代は忍び姿にて笠をかぶりて出づ。男は又もや笛を吹く。女は蛇の頭をなでてゐる。岩千代は堤を降りて花道へゆきかゝりしが、こなたを見かへりて立戻る。）

岩千代。　ちと物がたづねたい。

女。　はい、はい。なんの御用でございます。

（男は笛を吹きやめる。）

岩千代。　そち達はこの小屋に住む者か。

男。　左樣でございます。

岩千代。　近頃このあたりに盲目の乞食が徘徊いたすとか聞き及んだが、左樣かな。

女。　盲の乞食ならばこの小屋にも住んでをりますが……。

岩千代。　年のころは廿七八、以前は武士で筋骨たくましき男ぢや。

男。（女を見かへる。）どうも彼奴らしいぜ。

女。さうだねえ。そのおたづねの盲によく似た男が、こゝの小屋に住んでをります。

男。どこの者だか存じませんが、なんでも先月のはじめ頃から、この仲間で古顔の與兵衛といふ老爺さんが引張つて來たのでございます。

岩千代。して。今はいづこに居るな。

女。與兵衛老爺さんと一緒に、どこへか物を貰ひに出ましたが、やがて戻つて來るでございませう。

岩千代。夕暮までには戻るであらうな。

女。きつと戻つてまゐりませう。

（岩千代うなづきて懐中より錢を出す。）

岩千代。その男が戻つて來ても、わしの來たことを必ず云ふなよ。よいか。

女。はい、はい。かしこまりました。

（岩千代は錢をなげて遣る。）

女。おありがたうございます。

（岩千代は笠をかたむけて去る。女は落ちたる錢を數へてゐる。）

男。おい、それはお前ひとりで取るのぢやあるまいな。

女。だつて、お禮はあたし一人で云つたんだよ。

男。でも、おいらだつて口を利いたぜ。いくらか分けて呉れてもよからう。

女。うるさいねえ。お前さんは笛さへ吹いてゐりやあ可いと云つたぢやないか。

男。腹が空つちやあ笛も吹けないぜ。

女。ぢやあ、あたしと一緒に行つてくれるかえ。

男。それは些と考へものだ。

女。それ御覽よ。あたしだつて嫌なこつた。

（女は錢をかぞへて懐中に收める。鳥の聲きこゆ。男はぼんやりと空を仰ぐ。）

男。あゝ、渡鳥の聲がきこえる。もうそろ〳〵と寒くなるなあ。

女。だん〳〵に冬が來るんだねえ。

男。その蛇がおまへの肌にあたゝめて貰ふ時節が來るんだ。

女。秋も末になると、なんだか心細いねえ。

（水の音さびしくきこゆ。盲目の池田丹後、零落して乞食となりたる體、太刀を背負ひて竹杖をつき、乞食の頭與兵衛に手をひかれつゝ、堤の上をあゆみ來る。與兵衛は五十前後の老人なり。）

與兵衛。　これ、氣をつけてあるくが可いぞ。俄盲といふものは兎かくに感が惡いものだ。

丹後。　この頃は大分あゆみ馴れたれば、さのみ不自由とも思はぬのぢや。

與兵衛。　さういふ口の下から、すぐに躓くではないか。強情ももう好加減にしたがよい。

（云ひつゝ堤を降りて小屋のまへに來る。）

男。　喧嘩相手が歸つて來たぜ。

女。　ほんたうに見るから癪に障るねえ。

與兵衛。　どうだ、けふは貰ひがあつたか。

男。　相變らず不景氣でしたよ。

與兵衛。　わしはこの男を引張つて、遠い町まで出あるいたお庇で、錢と米とをこれほど貰つて來たぞ。（麻の袋に入れたる錢と米とをみせる。）

女。　なるほどおぢいさんは能く稼ぐねえ。お盲さんは仕合者だ。

丹後。　わしは眼がみえないでも、稼ぐから收入もある。お前たちは滿足な身體をもちながら、遊んでゐるから錢が取れぬのぢや。

男。　もうそろ〳〵と初めたぜ。

女。　もし、お盲さん。けふは少し御相談があるんですがね。

丹後。　なんぢや。

女。　それを第一にあらためて貰ひたいんです。むかしは何であらうとも、今は御同樣の身分ですよ。あたまから人を嚇かすやうな、そんな大風な物言ひは止して貰ひませう。

丹後。　わしは武士ぢや。袖乞ひ詞などは些とも知らぬわ。

男。　郷に入つては郷にしたがへといふ譬もある。一旦小屋に落ちたからは、これから五分五分のお附合に願ひたいものだ。こゝにゐる者はおまへさんの家來ぢやないんだからね。

丹後。　武士が乞食を家來にするか。云はずとも知れたことぢや。

女。　それからおねがひ申したいのは、おまへさんが背中に脊負つてゐる長い物ですがね。この小屋に三人でさへも狹いところへ、このごろお前さんが一人殖えて、おまけに寢るにも起きるにも、その長い物を脊負つてゐられちやあ何分邪魔になつて、手も足もゆつくりと伸ばせませんからね。そんなものは捨てるとも賣るとも型を付けてしまつて下さいな。

丹後。なに、この太刀を手放せと申すか。

女。邪魔だから止せと云ふんですよ。

丹後。だまれ。いかに零落いたせばとて、家重代の銘刀を手放してならうか。かさねて申さば免さぬぞ。

女。ぢやあ、その刀で斬る氣かえ。盲のくせに氣の強いことを云ひなさんな。いくら威張つたつてひとり歩きもできない癖に……。ほんたうに憎らしいねえ。もし、お盲さん。おまへさんは自分一人、あたしには斯ういふ味方が附いてゐるんだよ。

（持つたる蛇を丹後の鼻のさきへ突き付ける。丹後はその手を捉へて捻伏せる。）

丹後。おのれ、盲目と侮つて無禮するな。つかみ殺すから覺悟いたせ。

與兵衛。（支へる。）あ、これ、手暴なことをしてはならぬ。まあ、待たつしやれ、待たつしやれ（ふたりを引分ける。）みち〳〵も云ふた通り、袖乞仲間にもまたそれ〴〵の作法がある。いくら以前が武士だと云つて、こなたのやうに大風にかまへてゐては、仲間の者と折合がつくまい。もう少し素直にしてはどうだな。

丹後。素直にせよとは、あの乞食め等に追從輕薄をいへと申すのか。

男。ちよいと云ふことがあの通りだ。

女。あれだから憎らしいんだよ。自分も乞食の仲間入りをしてゐながら、乞食め等もよく出來た。（男にむかひ。）もし、お前さん。もういよ〳〵見切るかね。

男。見切つた方がよささうだよ。こんな男と一つ小屋にゐることは眞平だ。

女。おまへさんが行くなら、あたしもお別れだ。

與兵衛。なんだか可怪いな、お前たちは何うすると云ふのだ。

女。おぢいさんには永らく御世話になつたが、こんな變な奴と一緒にゐるのは面白くないから、今日かぎりで立退きますよ。

與兵衛。まあ、まあ、そんなに腹を立つものではない。

男。おいらももう何處かへ行くよ。

與兵衛。みんなが一度に行つてしまつては後がさびしい。今まで仲よくしてゐたのだ。まあ、大抵のことは我慢しろよ。

女。折角ですが御免を蒙りますよ。あたしはこの蛇さへ持つてゐりやあ、どこへ行つても商賣はできるんですからね。立派に蛇つかひで世が渡れるんですからね。

男。　おいらもこの笛が一本あれば、どこの門に立つても、一文や二文の錢は貰へるのだ。

與兵衛。　それはさうでもあらうが、そこが我慢といふものだ。

女。　堪忍も我慢ももう飽きましたよ。全體、おぢいさんが惡いよ。こんな奴さへ引摺り込まなければ、三人がいつまでも仲好くしてゐられたものを……。

男。　そんなことを云つたつて仕樣がない。おぢいさん、達者でゐなさいよ。

（男はそのまゝ行きかゝる。）

女。　さうして。お前さんはどこへ行くの。

男。　さつきも云ふ通り、好きな笛をふいて、勝手な所をさまよつて歩くのだ。

（男は笛をふきながら上の方へあゆみ去る。女は小屋の内に入りて、鏡と小さき包を持ちて出づ。）

女。　おぢいさん、あたしもお暇申しますよ。

與兵衛。　おまへ達は何うしても行つてしまふのか。

女。　御緣があつたら又お目にかゝりませうよ。

（女は丹後を憎さげに見かへりつゝ、堤を上りて下の方へあゆみ去る。與兵衛は茫然とあとを見送る。）

與兵衛。　ひとりは西へ……一人は東へ……。今朝まで一つ小屋に仲よく住んでゐたものが、夕方にはこの通り分れ〳〵だ。あいつ等はなにを目的にどこへ行くのだらう。いや、かういふ境涯に馴れた奴は、それからそれへと飛びまはつて、風に吹かれた落葉のやうに、どこまで行つて止まるか、自分にも判らないのだらう。

（與兵衛は獨語。丹後はあたりに耳をかたむける。）

丹後。　ふたりの奴共はもう行つたのか。

與兵衛。　どこを的とも無しにふら〳〵と行つてしまつた。かうなると、あとに殘るのはこなたと私と二人ぎりだ。今夜から些と寂しからうぞ。

丹後。　かれらのやうな下賤な徒は、一緒に居らぬ方が結句ましぢや。

與兵衛。　二口目にはそのやうなことを云ふから、とかくに人と折合はぬのだ。が、まあそれも仕方が無い。なにしろ日が暮れかゝつて薄ら寒くなつて來たから、ちつと焚火でもしようかな。

丹後。　それがよからう。

與兵衛。　二人が居なくなると、やれ、やれ、いそがしいぞ。

（與兵衛は小屋のかげより枯枝を持ち來りて、焚火をする。ふたりは火を圍む。）

與兵衛。 今まではほかに人も居たので、委しいことも聞かなんだが、かうして差向ひになれば遠慮はない。忘れもせぬ先月のはじめに、こなたがその體裁をして、淀川端にさまようてゐたのを、わしが氣の毒に思つて連れて來て、けふまで一緒に暮してゐるが、立派な太刀を身につけてゐる樣子といひ、物の云樣から起居振舞、以前はさだめて由緒あるお人と見たがあやまりか。差障りが無くばこなたの素性來歴を、話して聞かしてはくださらぬか。

丹後。 いま立去つた二人とは違うて、こなたは賴もしい親切な男ぢや。わしの身の上をつゝまず話して聞かさう。わしは松永彈正の家來で、池田丹後といふもの。五月十九日、室町御所夜討のみぎり、主人松永にたのまれて公方家を擇み擊にせうと企てたが、相手はきこえし早業の達人、打物をすてゝ組討と相成つた。

與兵衛。 おゝ。

丹後。 しばしは上になり下になり、やう〳〵組み伏せて首を取つたが、襖の骨で眼を傷つけ、その場よりこのやうな盲目となつてしまふた。扨さうなると賴まれぬは人心ぢや。もし公方家を討取らば、わが娘の婿にせうと誓ひし詞を反古にして、主人は我をかへりみず、朋輩も家來もわれを扶けてはくれぬ。無念とは思へども盲目の悲しさ、われに十分の道理あれども家を討つたる天罰などと、愚な奴等はいふであらう。（苦笑ひする。）

與兵衛。 では、この五月に公方樣を討つたのは、こなたの仕業でござつたか。

丹後。 あのみぎりに第一の功名をあげたは、この池田丹後ぢや。

與兵衛。 なるほど功名には相違あるまいが、人もあらうに公方樣を手にかくるとは、こなたも大それた事をさつしやれたなう。その罰で眼が潰れたとは、こりや然うなうてはならぬ事だ。天罰のおそろしいと云ふことを、こなたも思ひ當つたでござらうな。

丹後。 はゝ、なにが天罰……。世間では公方家を尊い者のやうに云ひなすが、兄利の先祖尊氏もおなじく謀叛人ではないか。わしは不運で眼が潰れたればこそ、謀叛人の天罰のと人に爪彈きせらるゝが、もし滿足なからだであつたら、今ごろは松永の姫を妻として、あつぱれ果報者よと人に羨まるゝであらう。丹後が斯樣におちぶれたは、天罰でもない、謀叛のためでもない。主人がわれを詐つたからぢや、朋輩や家來がわれを見捨てたからぢや。不正、不義、不實の徒が多いからぢや。（空を睨んで罵るごとくに云ふ。）

與兵衛。 さう云へばそれも一理窟ぢやが……。まあ、今更それを云うても返らぬ。何事も運だとあきらめて、人を恨まず世を呪はず、心を平に持たれたがよいぞ。して、こなたが婿になるといふ相手の姫とやらは、その後どうさつしやれたな。

丹　後。 その女は……。どうして居るのやら一向に知らぬ。名は多門といひ、容貌は萬人にすぐれ、洛中にもならびなき美人であつたが……。(嘆息して。)あゝ、この眼が見ゆればなう。

與兵衛。 その女子には、こなたもよく〳〵心殘りとみえるな。

丹　後。 諸人の嫌ふ役目を引受け、公方家を討取つて、命がけの働きしたも……この眼を失うたも……かの女子を得たいがためばかりぢや。心が殘るも無理ではあるまい。あの美しい姫の顏は、見えぬ眼にもあり〳〵と映つてゐるわ。秋風のさむい小屋のうちで、夜露にぬれつつ眠る間も、姫のすがたを夢に見るのぢや。

與兵衛。 それはよく〳〵の執心と見ゆる。その多門とかいふ姫がなかつたら、こなたも武士を捨てまいものを……。いや、こなたばかりで無い。戀のために身をすてた男はむかしから數々ある。まあ、聽かつしやれ。なんでも遠い昔のことださうだが、この淀川べりに若い男と女が住んでゐた。男は女に戀想して、いろ〳〵に心を碎いて云ひよると、女もしまひに根負がして、そんなら今夜この堤の下で逢はうと約束したので、男は日のくれるのを待兼ねて、約束の場所へ行つて待つてゐたが、女は更に姿をみせぬ。それは霜の寒い晩であつた。男は凍えるばかりの寒さを堪へて、今か〳〵と待ち暮してゐるうちに、たうとう夜が明けてしまつたが、女のあし音もきこえなかつた。そこで男は女の薄情を恨むのあまりに、川へ身をなげて死んでしまつたといふ。その片思ひが今も殘つてゐるとみえて、そこの岸に年々生える芦は、決して兩方に葉が出ないのも不思議ではないか。

丹　後。 片葉の芦とか歌によむのはそれでござるな。

與兵衛。 それからその芦を片葉の芦といひ、その岸に近いところを片葉の芦の淵とも云ふのだ。こなたもその女子のことばかり思ひつめて、片葉の芦になつては詰らぬ。もう〳〵緣のないものと諦めたがよからうぞ。

丹　後。 あきらめらるゝ戀であらうか。

與兵衛。 と云つて諦めるよりほかはあるまい。こなたは氣の強いくせに諦めの惡い男だなう。

(焚火やうやく消ゆ。水の音きこゆ。)

與兵衛。 おゝ、話に夢中になつてゐるうちに、焚火もいつか消えかゝつた。秋も末になつたので、

日が暮れかゝるとだん〳〵に寒くなつてくる。こりや焚火ぐらゐでは追付くまい。酒でも飲んで腹のなかから温めねば、とても今夜は凌がれぬぞ。かういふ時に蛇つかひの女がゐると使にやるには重寶だが……。まあ、可いわ。わしが一走り行つて買つて來ようか。

（與兵衛は小屋の内に入りて、瓢を持ち來る。）

與兵衛。 わしは隣村まで酒をかひに行くほどに、焚火を斷やさぬやうにして待つてゐさつしやれ。

丹後。 御苦勞でござるな。

（與兵衛は瓢を持ちて上の方へいそぎ去る。丹後は探りながら枯枝を焚火にくべる。水の音さびしく、入相の鐘きこゆ。）

丹後。 おゝ、鐘が鳴る。秋の日もやがて傾くとみゆるな。五月十九日、松永の屋敷で勢揃ひをした時にも、おなじく入相の鐘を聞いた。あの時には……おゝ、あの時には……。首尾よく公方家をうち取つたら、日頃の望みも叶ふことゝ、胸は躍つて血は湧いて、手のとゞかぬ大空の月を攫んだやうに、よろこび勇んで日の暮れるのを待つたが……。その折に聞いた鐘の音は、天上の音樂のやうにもきこえたが……。つかんだと思うたのは矢はり水の月で、手にも止らず碎けてしまふた。この兩の眼が潰れると共に、夜も晝も一切暗。おなじ鐘の音でも、聞く人の心によつて響きが違ふとはよく云うたものぢや。丹後がいま聞く入相の鐘は、地獄の迎ひのやうにも聞ゆる。（嘆息して。）いや、地獄と云へば、ゆうべは我手にかけた公方家が、地獄の鬼となつて枕もとにあらはれた夢をみた。生きてゐるうちさへも恐れぬ將軍が、死んだ後に何怖からう。（あざ笑ふ。）おのれ、睨み返へして呉れうとよく視ると鬼の顔は忽ち多門の美しい女の顔とかはつた。夢は不思議なものぢやなう。

（丹後はさびしく笑ひつゝ、焚火に枝をくべてゐる。船唄の聲遠くきこゆ。）

丹後。 唄〳〵淀の川舟逢うては別れ、上り下りでまゝならぬ。

淀を下る船唄が風に送られて遠くきこゆるわ、淀の川舟逢うては別れ、のぼり下りでまゝならぬ。哀れを知らぬ船頭共も、優しい戀を唄うてゐるわ。

（船唄の聲又きこゆ。）

多門。 唄〳〵ぬしとわたしは片葉の芦よ、ふたり連れ添ふ時はない。

（堤の上より松永の娘多門を白木の舁輿にのせて、家來二人がこれを舁き、伊賀七郎が先に立ち、侍女二人と家來數人が附添ひて出づ。）

七郎。 日暮もいかう詰つたなう。

七郎。あきの日は釣瓶落しと昔から申すに嘘はござりませぬ。急ぐとすれど、もはや暮近く相成りました。

多門。淀の渡を越えるときに、入相の鐘を聞いたやうであつたが、京ももう眼の前ぢや、さのみ急ぐにも及ぶまい。蟲の音を聞きながら野路をゆくも風流であらうぞ。

七郎。人家のある所までまゐりましたら、松明の用意をいたさせませう。

（主従は語りながら堤をおりかゝる。丹後はその辟に耳を傾けゐたりしが、今や主従が堤を降りたる時、俄に聲をかける。）

丹後。あいや、卒爾ながらおたづね申す。唯今そこを通るのは、松永の娘多門でないか。

七郎。いかにもさうぢや。

丹後。おゝ、多門か。

（丹後は焚火のそばを離れて少しく這ひ寄る。）

七郎。えゝ、袖乞どもの分際で、松永殿の御息女を呼び捨てにするとは無禮な奴め。物がほしくば土に頭をさげて御慈悲をねがへ。

丹後。呼び捨てにしても苦しからぬ筋あればこそ、多門と呼んだがなんとした。夫が妻の名をよぶに不思議があらうか。

七郎。なんと申す。（不審ながらに透しみる。）御息女に對して、夫の妻のと……。おのれは氣でも狂うたのか。かさねて無禮を申さば捨置かぬぞ。

丹後。さう云ふ聲は伊賀七郎か。主の威勢を嵩にきて、相も變らず強いことぢやな。

七郎。や、われを七郎と知つたるは……。おのれは何者ぢや。

丹後。半年逢はぬ間にもう忘れたか。池田丹後の面をみい。

七郎。なに、池田……丹後ぢやと……。

（七郎はおどろきて立寄り、焚火の火かげに丹後の顔をうかゞひ視る。）

七郎。なにさまお身は池田丹後ぢや。さりとは思ひも寄らぬこの姿は……。

丹後。この姿には誰がした。池田丹後ともあるべき武士を、袖乞には誰がした。松永彈正といふ日本一のいつはり者と、お身達のやうな不人情者とが寄合うて、われを奈落の底へ突き落したのぢや。

（丹後は怒つて罵る。多門は左右を見かへる。）

多門。輿を卸しや。

室町御所。

家來。はつ。

（家來は輿を舁きおろす。多門は徐かに輿を出でて、丹後のそばへ進み寄る。）

多門。丹後、久しう逢はぬ。妾は多門ぢや。

丹後。おゝ、多門……。

（丹後は俄に笑をふくみて、這ひ寄りつゝその袂を捉る。七郎おどろきて遮らんとするを、多門は眼で制す。）

多門。（詞しづかに。）人家に遠き淀川堤、ほかに聞く耳がなければとて、故主や朋輩の惡口は些と嗜んだがよからうぞ。恨みがあらば妾にいへ。父上や七郎を恨むは筋ちがひぢや。

丹後。勿論、お身にも恨はある。とは云へ、娘の多門を丹後の妻にくれうと、約束したは父の彈正ぢや。又その約束を破つたも父の彈正ぢや。

多門。親といひ、子と云うても、人の心はみな別々ぢや。父上のおほしめしは妾の知らぬこと。妾にはまた妾の心がある。

丹後。お身もその場に居合はせながら、その約束を知らぬと云ふか。知つても不承知と云はるゝか。

多門。いや、知らぬとは云はぬ。不承知とも云はぬ。日ごろは一廉の勇士顔する者共も、素破といふ時には公方家の威光に恐れて、みな逡巡をするなかに、われから名乘つて出た岩槻主水と池田丹後のふたりは、男のなかの男ぞと、わらはも頼もしう思うてゐました。

丹後。その丹後は約束を違へず、みごとに將軍の首を取つたぞ。

多門。將軍を討つたは手柄ぢやが、味方の主水助をなぜ殺した。

丹後。主水助は味方でない。われに取つてはおなじく敵ぢや。お身と彼とが戀してゐることは、丹後はかねて存じてをる。その主水めを生けて置いては邪魔になる。

多門。その心根が憎いので、妾はそちを見限つたのぢや。盲目になつた心の僻みから、味方を不意撃にした卑怯者……。

丹後。なに、丹後が卑怯者ぢやと……。

多門。（辭するどく。）おゝ、卑怯ぢや、卑怯ぢや。公方家をうち取つて見事に功を立てたなら、はじめの約束を楯にして、なぜ男らしう妾をうけ取らぬ。さうなつたら逃れぬ義理で、妾も戀を捨てまいものでもないが、罪もない味方を先に殺しておく卑怯者。それが武士のすることか。そのやうな卑しい根性で、多門を妻に持たれうか。約束を破つた罪を人に責むる

な。約束を破つたはそちの罪ぢや。自業自得ともいふものぢや。

（丹後は默して聽きゐる。）

多門。これほど云うて聞かしたら、そちにも得心がまゐつたであらう。おのれの罪をかへりみて、人を恨むな、世を恨むな。けふは男山の八幡宮へ參詣して、日くれて京へ歸る途中、こゝで逢うたは勿怪の幸ひぢや。これだけ云ふたらほかに用はない。（袂を拂ひて。）乘物これへ……。

家來。はつ。

（家來は輿を持ち來る。多門は乘らうとするを、丹後はあわてゝ遮る。）

丹後。いや、それは理を非にまけて、鷺を烏と云ひくろむる逃口上ぢや。丹後にはまた丹後の云分がある。たとひ味方を殺さうとも、約束は約束で反古にはならぬぞ。お身は飽までも丹後の妻ぢや。この小屋がお身の住家で、ほかに歸るべき家はないぞ。

七郎。えゝ、邪魔するな。退け、のけ。

（丹後をつき退けて多門を輿にのせる。）

丹後。（叫ぶ。）多門。待て。夫を捨てゝいづこへゆく。多門……多門……

（丹後は行かんとするを、家來等は支へる。多門は輿に乘つて下の方へゆく。丹後は探りながら又追はんとするを、七郎等はおさへ付ける。）

七郎。なにか引縛るものはないか。

（多門はくれなゐの細紐を解き、無首にて投げあたへる。七郎は細紐を取り、暴れ狂ふ丹後を大勢にて引つくゝる。）

七郎。人の目に觸れぬやうに、その小屋のなかへ投げ込んで置け。

家來。はつ。

（家來等は丹後をとらへて無理に小屋のなかへ押込み、外より莚をおろす。）

七郎。思ひもよらぬ奴に行き逢うて、大きに時刻を移しました。

（多門は七郎を招きてさゝやく。七郎うなづく。）

七郎。然らば途中より取つて返して……。

（多門うなづく。）

七郎。はつ。

（七郎は矢はり先に立ち、多門をはじめ、侍女家來共も附添ひて去る。上の方の奥にて笛の聲遠く

室町御所

きこゆ。東の花道より大館岩千代出づ。）

岩千代。室町御所にて死ぬべき命を、今日までおめ〳〵ながらへしは、亡き上様が修羅の御無念を晴さうためぢや。近頃こゝらに徘徊する盲目の乞食は池田丹後に相違あるまい。まづ彼奴を討取つて……。むゝ。

（岩千代はあたりを見かへりつゝ、小屋の上の方に忍びよる。）

岩千代。盲目の乞食は戻つたか。

（内には返答なし。岩千代はかさねて呼ぶ。）

岩千代。池田丹後は居らねか。

丹後。（小屋のうちにて叫ぶ。）丹後はこれに居る。多門を渡せ、妻をかへせ。

（岩千代うなづきて太刀を抜き、更に左右をうかゞふ。舞臺やうやく暗し。向ふより以前の七郎は一散に駆け來り、これも太刀をぬきて矢庭に小屋のなかへ突き込まんとし、思はず岩千代と顔を見あはせ、たがひに悠然として透しみる。）

七郎。誰ぢや。

岩千代。たれぢや。

（消え殘る焚火の光に、ふたりは再び透しみる。）

岩千代。おゝ。七郎か。

七郎。岩千代か。

（岩千代は物をも云はずに切つてかゝる。七郎も引受けてしばし鬪ひしが、遂に敵せずして元來し方へ逃げゆくを、岩千代もつゞいて追うて去る。堤下の上の方より與兵衛はふくべを持ちて出づ。）

與兵衛。左のみ遠い路でもないに、往還りするうちに日がぱつたりと暮れてしまつた。年を取ると意氣地がない。（小屋の中をうかゞひて。）盲殿や、もう寢てしまつたのか。さあ、酒を買つて來たぞ。一杯飲んでから寢たがよからう。秋の夜はなか〳〵長いわ。（莚をあげておどろく。）これ、こなたは何を唸つてゐるのだ。俄に病氣でもおこつたのか。これ、どうさつしやれた。

（與兵衛は細紐にくゝられたる丹後を引き出して、透しながめる。）

與兵衛。や、こなたはくゝられてゐるのか。おゝ、あかい細紐のやうなもので嚴重に縛られてゐるわ。こりや一體どうしたのだ。（云ひつゝ縛られたる細紐を解く。）

丹後。（呻くやうに。）多門はいづれへまゐつた。

室町御所

與兵衛。　多門とは誰ぢや。

丹　後。　松永の娘、わが妻ぢや。

與兵衛。　そんな人はこゝにはゐぬぞ。いや、こんな細紐があるからは、もしや女が來たのかな。

（與兵衛は不審さうに細紐をながめる。丹後は探り寄つてその細紐を奪ひ取る。與兵衛はいよ〳〵呆れる。）

與兵衛。　留守のあひだに何があつたのやら、わしには些とも判らぬが、こなたはどうやら樣子が可怪いぞ。まあ、落ちついて譯を話さつしやれ。

丹　後。　松永の娘がこゝへ來た。

與兵衛。　松永の息女ともお姫樣ともあらう者が、今頃こんなところへ來るとは合點が行かぬ。こゝらには惡い狐が澤山ゐるから、こなたは化かされたのではないか。

（夜はいよ〳〵暗くなりて、遠き堤のうへに無數の狐火みだれて飛ぶ。）

與兵衛。　狐だ、きつねだ。きつと狐の仕業に相違ない。あれ、あの通り、狐火が燃えてゐるわ。

丹　後。　なに、火が燃ゆる……。

與兵衛。　狐火が行列して通るのだ。

丹　後。　行列は姫の行列か。

與兵衛。　いや、きつねの行列だ。

丹　後。　むゝ、公方家の行列か。公方が行列を揃へてどこへゆく。この丹後を征伐にまゐつたか。

（背負ひし太刀をぬきて起ち上る。）

與兵衛。　あ、これ、どうさつしやれた。

丹　後。　なんの、將軍……。なんの、羅刹……。阿修羅の眷族一度に押寄せて來るとも、それを恐るゝ丹後と思ふか。

（丹後は太刀を振りかざして空を切る。狐火しきりに燃ゆ。）

丹　後。　おゝ、主水か。なんの、おのれが……。（又もや太刀を振つてあたりを切る。）

與兵衛。　これ、これ、あぶない。待たつしやれと云ふに……。

（丹後は更に上の方にむかつて、叫ぶ。）

丹　後。　や、多門か。おゝ、多門……。わしも一緒にゆくぞ。多門……。待て、待て。

（丹後は片手に細紐を持ち、かた手に太刀を持ちて、迷ふが如くにふら〳〵と行く。與兵衛いよ〳〵驚きて支へんとするを、丹後は太刀の柄にて突退くれば與兵衛は倒れる。）

丹後。　多門……おゝ、多門……。

（丹後は上の方へよろめきながら迷ひゆく。向ふより岩千代は再び引返して走り出で、小屋のまへに來りて與兵衛につまづく與兵衛はその足に縋る。）

與兵衛。　まあ、待たつしやれ。

岩千代。　えゝ、邪魔するな。（與兵衛を蹴放す。）

與兵衛。　（心づく。）や、丹後どのでは無かつたか。

岩千代。　その丹後はいづれへまゐつた。

與兵衛。　さあ、今までこゝに居りましたが、なにか判らぬことを云ひながら、狐に化かされたやうにうろ〳〵と……。

岩千代。　むゝ。して、如何いたした。

（この時、上の方の奥にて水の音きこゆ。）

岩千代。　や、あの水音は……。

與兵衛。　盲の癖に駈けあるいて、もしや川へでも陥つたか。

岩千代。　兎にかく實否を見とゞけねばならぬ。案内いたせ。

與兵衛。　はつ。

（二人は行かんとする時、上の方より以前の笛をふく男出づ。）

男。　これ、盲の乞食が川へおちたぞ。

與兵衛。　なに、盲が川へ落ちた……。

男。　おいらがあすこの岸で笛を吹いてゐると、あの盲がうろ〳〵と迷つて來て……。

岩千代。　して、自殺か過失か。

男。　そこはなんとも判りませんが、あすこは片葉の芦の淵と云つて、昔からよく人の死ぬところだと聞いてをります。

與兵衛。　むゝ、あれもやつぱり片葉の芦だなあ。（歎息する。）

（岩千代は殘念さうに川の方を見かへる。月出づ。男は月を仰ぎて笛を吹く。水の音さびしくきこゆ。）

——幕——

切支丹屋敷

大正二年三月作。

大正二年五月。新富座初演。

初演當時の役割――井上筑後守（市川市十郎）山下伊織（市川壽美藏）ヨハン（市川左團次）朝妻（市川松蔦）みつの（坂東かつみ）彌市（中村又五郎）七助（市川荒次郎）曾平次（市川左升）三五郎（市川左喜之助）など。

登場人物――宗門奉行井上筑後守。井上の家臣山下伊織。伊太利人ヨハン。吉原の遊女朝妻。禿みつの。囚人奥州の彌市。久留米の七助。牢番曾平次、三五郎。

（一）

（江戸の小石川、宗門奉行井上筑後守の下屋敷にて、邸内に假牢あり。牢は舞臺の上の方へよせて、斜めに格子をみせ、よきところに首だけ出る穴あり。舞臺の中央には櫻の大樹ありて、いまや花の盛りなり。正面には庭の木立みゆ。正德五年三月なかばの午後。

（牢の前には荒むしろを敷き、牢番三五郎は棒を持ちて休みゐる。おなじく牢番曾平次は棒を持ちて出づ。）

曾平次。 いや、御苦勞、御苦勞。年を取ると氣がせいて、午飯をかつ込んでゐる間もなんだか落付いてゐられないやうだ。留守のあひだに何も變つたことはあるまいな。いや、飯を食つてゐるぐらゐの間に、變つたことが出來しては大變だ。が、ほかの罪人とは違ふから、嚴重

の上にも嚴重に用心しなければならない。(云ひつゝこれも莚の上に腰を下す。)どうだ。好い天氣になつたではないか。

三五郎。　花がさいたら世間が急に明るくなつたやうだ。それにこの頃は天氣がつゞくので、なほほ陽氣が春めいて來たな。

食平次。　と云つても、かうして毎日御用を勤めてゐては、めつたに外へも出られず、飛鳥山や、上野の花も人のうはさを聞くばかりだ。盜人と切支丹の種はつきないので、こつちと等もなか〳〵樂は出來ないな。

三五郎。　盜人はいくら殖えても、傳馬町へ送り付けるから構はないが、切支丹の殖えるのは眞平だ。時にこの牢にゐる吉原の女も、いよ〳〵近いうちにお仕置になるらしいぜ。

食平次。　むゝ、さうだらう。疾うにお仕置になる筈であつたが、この櫻の花ざかりを一目見た上で死にたいなどと、勝手なことを願ひ出して、けふまで首が繋がつてゐるのだ。しかしこの通りに花も咲いたから、もう長いことはあるまいよ。花が見たければ仲の町の櫻が自由に見られるものを、吉原からこんな暗いところへ送られて、揚句の果に首がとぶとは、馬鹿な女もあつたものだ。

三五郎。　いくら美しい花魁でも太夫でも、切支丹と聞いては色氣が冷めるな。さうは云ふものゝ。(屏より烟草入を取り出して。)早い話がこの烟草だ。はじめて南蠻から渡つた時には、決して喫むなといふ嚴しい御禁制であつたが、いつとも無しに御法も弛んで、いまでは誰でも喫むやうになつた。これを思ふと切支丹も今にどうなるか判らないな。

食平次。　馬鹿野郎……。(叱り付ける。)大きな聲でそんなことを云ふな。もし役人衆の耳へでも這入つたら何うする積りだ。つまらないことを饒舌つてゐないで、早く飯でも食つて來い。

三五郎。　なるほど、こりやあ謝まつた……。(起ち上る。)おれはお前と違つて氣が長いから、烟草でも喫んで一休みして、ゆつくりと飯を食つてくるぜ。

食平次。　よし、よし。五杯でも十杯でも腹の裂けるまで食つて來い。おれが一人で眼張つてゐれば大丈夫だ。

三五郎。　ぢやあ頼むよ。

食平次。　むゝ。

(三五郎は下の方に去る。)

食平次。　あいつも食ひ意地の張つた野郎だな。しかしこんな商賣をしてゐちやあ、食ふと飲むとの

ほかに樂みはあるまいよ。はゝゝゝゝ。おれも切支丹は嫌ひだが、烟草は大好きだ。どれ、一服やらうかな。

（曾平次は煙草を打ちて烟草をのむ。風の音して櫻の花ちる。）

曾平次。　おゝ、花もそろ〳〵と散りはじめたな。よし原の女もけふか明日はこの木の下で切られるのだらうが、よりに擇つてこゝで殺さずともものことだが……。（鼻唄のやうに。）咲いた櫻になぜ騎つなぐ……。あゝ、好い陽氣になつて來た。一年中ではやつぱり春が好いなあ。

（山下伊織、廿二三歳、下の方より出づ。曾平次は見るより起ち上る。）

曾平次。　お見廻り御苦勞でございます。

伊織。　其方達も大儀だな。三五郎はいづこへまるつた。

曾平次。　唯今わたくしと交代で、午飯を食ひにまるりました。

伊織。　おゝ、左樣か。

曾平次。　すぐに御牢内をお見廻りに相なりますか。

伊織。　（少しくかんがへる。）その前に女牢のものに申し聞かせる筋がある。

曾平次。　では、あの女もいよ〳〵お仕置にきまりましたか。

伊織。　さあ、それについて今一應改宗を諭してみたいと思ふ。これへよび出せ。

曾平次。　はつ。

（曾平次は出入口の錠をあける。）

曾平次。　朝妻、出ませい。

朝妻。　はあ。

（牢の内より吉原の遊女朝妻、廿歳、やつれたる姿にて出づ。伊織は頤にて指圖すれば、曾平次は心得て莚を櫻の下に持ち來る。朝妻は曾釋して莚の上に坐す。伊織は曾平次にむかひて云ふ。）

伊織。　其方はしばらくあれへ立て。

曾平次。　かしこまりました。

（曾平次は不審さうに小首をかたむけながら下の方に去る。伊織はあとを見送りて、これも莚のうへに小膝を突く。）

伊織。　朝妻、見やれ。櫻ももう咲き揃ふたぞ。

朝妻。　みごとに咲きました。

伊織。　花を散らすは惜しいものだなう。

（心ありげに朝妻の顔をみる。朝妻は默して俯向く。）

伊織。　くどくも申すやうだが、花を散らすも散らさぬも、其方の心一つであるぞ。心を入れ替へて改宗いたさぬか。どうだな。

朝妻。　ありがたうござります。

伊織。　改宗するか。

朝妻。　さあ。

伊織。　其方は吉原に勤めの身でありながら、窃かに御禁制の切支丹を信仰するといふことを訴人あつて召捕つたのは正月のはじめで、吟味の末にいよ〳〵死罪とさだまつたは、二月半のことであつたが、この櫻の花を見るまでは、お仕置を御猶豫くだされと、其方が折入つてのねがひに、上も不憫に思召され、今日までそのまゝに差置かれたを、ありがたいとは思はぬか。邪宗門に歸依したは唯一旦の迷ひであらう。もし改宗を誓ふならば、かならず助命の御沙汰あるやうに伊織が計らうて取らせるぞ。

朝妻。　切支丹の信者といへば、謀叛人か狗畜生のやうにも扱はるゝ牢屋の中で、朝夕に心をつけ、優しく劬つてくだされました御親切は、死んでも忘れはいたしませぬ、心のうちでは拜んでをります。

伊織。　それほどまでに思うてくるゝなら、拙者の意見をなぜ肯かぬ。

朝妻。　肯きたうてもこればかりは……。

伊織。　どうでも改宗はできぬと申すか。

朝妻。　どうぞ免してくださりませ。

（朝妻泣く。伊織も歎息する。）

伊織。　これ、朝妻。世間の人は指を折つて、花のさく日を待つてゐるが、この伊織にかぎつては今年の花はおそく咲け、一日でも二日でも遲くさけと、ひそかに祈つてゐたとは知らぬか。待たぬ月日は早くすぎて、おそかれと願ふた花も咲いた。（梢を見あげる。）花が盛りを過ぎるにつれて、其方の命は一日ごとに縮んでゆく。もういつまでも猶豫はならぬ。實はけふの八つを合圖に、死罪と已に定まつたぞ。

朝妻。　この櫻の花ざかりを一目見た上で死にたいなどと、我儘すぎたお願ひもお前さまのお取なしで、首尾よくお聞濟みに相成りましたは、世にありがたいお情でござりました。三月もう半を過ぎて、牢屋の窓から朝櫻も夜櫻も、心のまゝに見盡しましたれば、何時お仕置

になりましても、ちつとも思ひ残すことはございませぬ。

伊　織。　殺さるゝ者に心残りはあるまいが、殺すものには未練がある。朝妻、察してくりやれ。

（朝妻はじつと俯向く。曾平次再び出づ。）

曾平次。　もし、伊織様。唯今こゝへ御奉行様がお越しでございます。

伊　織。　左様か。

（伊織は起ち上りて頤にて示せば、曾平次は朝妻を引立てる。櫻の花はら〳〵と散る。朝妻は牢の口へゆきかけて伊織と顔を見あはせ、うつ向き勝に牢内に入る。曾平次は入口の錠をおろす。）

曾平次。　あの女は改宗するとでも申しましたか。

（伊織は無言にて頭をふる。）

曾平次。　では、たうとうお仕置になるのか。あんな美しい顔をしてゐながら、切支丹といふ奴はよく〳〵強情なものと見えるなあ。

（井上筑後守は家來二人を連れて出づ。）

筑後守。　おゝ、櫻の花も見事に咲いたなう。これ、伊織。先日よりつなぎ置いた吉原の遊女も、もはや仕置をいたさねば相成るまい。其方より今一應理解を加へると申して居つたが、どうぢやな。

伊　織。　唯今もいろ〳〵と説き聞かせましたが、まだ十分に會得がまゐらぬやうにござりまする。

筑後守。　この上は是非におよばぬ。今日中に死罪に行へ。

伊　織。　今一日の御猶豫をねがひまして、明日にも又あらためて理解を加へましたら。

筑後守。　いや、いや、彼が願ひを聞きとゞけて、櫻の花ざかりまで捨置いたは上の慈悲ぢや。いつまで延ばしても際限があるまい。先刻も申渡した通り、この木の下で仕置をいたしたら、かれも定めて本望であらう。

伊　織。　はあ。

筑後守。　かれと共に召捕られたる禿みつのは、いまだ十五歳にも足らぬ者ぢや。且は切支丹について何事も存ぜぬやうであれば、朝妻の仕置が相濟み次第、再び廓へ戻してつかはせ。

伊　織。　心得ました。

筑後守。　まだそのほかには奥州の彌市、久留米の七助。この兩人の調べが相濟まぬな。

伊　織。　左様でござりまする。

筑後守。　ヨハンは如何いたした。病氣はよほど重いと聞いたが……。

切支丹屋敷

伊　織。　なにぶんにも我國の風土に馴れませぬのと、七年越しの牢屋住居とで、殊のほか疲勞いたしてをる樣子が相見えまする。

筑後守。　かれは詮議もせず、仕置もせず、唯いつまでも押籠めておく筈であるが、病中とは云へ南蠻の伴天連ぢや。他の者共をそゝのかして、牢内でいかなる惡事を巧まうも知れぬぞ。晝夜ともに見廻りを怠るな。

伊　織。　一日に三度づつは牢内を見廻つてをりまするが、この頃は枕もあがらぬ重態でござりますれば……。

筑後守。　いや、それが油斷ぢや。わしも一日に一度づつは必ずかやうに見まはつて居る。其方達は猶々氣をつけねばならぬぞ。

伊　織。　はあ。

（筑後守は家來をつれて下の方へ去る。伊織もつゞいて去る。牢格子の穴より朝妻は首を出してじつと伊織のあとを見送る。曾平次は櫻の下の莚を元のところへ敷き直しながら、思はず朝妻の顏を見あげる。朝妻は首を引込める。

曾平次。　飯を貰ふ時でもないのに、なんだつてそんな處から首を出すのだ。今からそんな眞似をしないでも、どうで獄門になる首だ。はゝゝゝゝ。

（二）

おなじく假牢内。正面は牢格子にて、上の方は男牢、下の方は女牢とし、そのまん中には粗き格子ありて、男女の室を仕切る。双方ともに板の間には荒莚二三枚をしきて、男牢は正面、女牢は下の方に錠をおろしたる出入口あり。

（男牢には伊太利の伴天連ヨハン、バッティス、四十餘歲。病に臥したる體にて荒むしろの上に横はる。囚人奥州の彌市はその枕邊に坐す。囚人久留米の七助は折釘を床板にて研いでゐる。女牢には今まで下の方を望みゐたる朝妻が徐かに坐にかへりて、禿みつのと共にうしろ向きになりて、あら莚の上に坐す。時廻りの柝の音きこゆ。）

彌　市。　おゝ、時廻りは九つ半か。このごろは夜の明けるのが早くなつたので日がめつきりと伸びましたなう。

七　助。　ましてなんにも所在ないので、朝から晩までつくねんとしてゐるので、猶々日の長いのには退屈する。時に伴天連樣はすや〳〵と眠つてござるやうだの。

彌市。いや、じつと眼を瞑ぢてござつても、眞實に眠つてゐらるゝのではない。この通り兩手を胸に組みあはせて、心のなかには絶えず神樣を念じてござるのぢや。なにをいふにも七年越しこんな暗いところへ押籠められて、おからだはます〳〵弱るばかり……。（聲を低めて）わしの鑑定では、もう長いことはあるまいよ。

七助。この一月ばかりは食物も碌々に喉へは通らず、湯と水とを啜つてゐなさるばかりだから、とても身體はたまるまい。お氣の毒なことだ。

彌市。情ないことぢやなう。わし達も遲かれ速かれ、重い仕置になるものと覺悟はしてゐるが、せめて斯うして生きてゐるあひだは、朝な夕なに伴天連樣のありがたい敎を聞いてゐたいと思うてゐたに、あすをも知れね御大病で、もしもの事でもあつた時は、あとに殘された私達はなんだか賴りない心地がするであらう。併しいつまでもこんなところに苦んでござるよりも、早く神樣の御手に救はれて天の御國へのぼられた方が、却つて伴天連樣のお爲かも知れぬ。

七助。さう云へばそんなものだが、こんなところでは死にたくないなあ。

彌市。それも神樣への勤めぢやと、日頃から伴天連樣に敎へられたのを忘れたか。わし達もふだんから覺悟して居らねばなるまいぞ。となりにゐる吉原の女郎を見やれ。女でも堅い信仰を持つて、けふか明日かの仕置の日を待つてゐるではないか。

（七助は默して釘をとぐ。牢の外には小鳥の囀る聲きこゆ。七助は顏をあげる。）

七助。表では頻りに小鳥が啼いてゐるな。この五六日は急に陽氣が春めいて來たやうだ。

彌市。暗い牢のなかでは月日の經つのもわからぬが、庭の櫻があの通り一面に咲き出したのを見ると、世間は春になつたのであらうよ。

七助。格子のあひだから吹き込む風もほか〳〵と暖かになつて來た。上野や飛鳥山も花盛りであらうなあ。

（云ひつゝ七助は頻りに釘を研ぐ。彌市は眼をつける。）

彌市。見ればさつきから窃々と何をしてゐるのぢや。

七助。え。

彌市。なんだか釘のやうなものを研いでゐるな。

七助。叱ッ、叱ッ。

彌市。釘を研いでなんにする。

七助。　え、これは些と入用があるのだ。

（この時、うしろの出入口の錠をあける音するに、七助はあわてゝ釘を隠す。出入口より曾平次が先に立てゝ伊織入り來る。）

伊織。　一同變ることはないか。

彌市。　はつ。別に何事もござりませぬ。

伊織。　左樣か。（云ひつゝ矢庭に七助の腕を取る。）唯今ふところに隱したものはなんだ。

七助。　え。

伊織。　これへ出せ。

（伊織は無理に七助の懷中をさぐりて、彼の釘を取出す。）

伊織。　この折釘はいかにして手に入れた。有體に申せ。

七助。　はつ。

（伊織は更に釘を打返してながめる。）

伊織。　折釘をかくし持つて、これを何に用ゆる積りだ。

七助。　はつ。

伊織。　囚人にはまゝある習。おのれこれを以て破牢する巧みであらうが……。さあ、まつすぐに申立てい。つゝみ隱さば拷問するぞ。

曾平次。　なるほど此の折釘で、氣長に牢格子を切破る積りでございませう。貴樣達にそんな途方もないことを仕出されたら、このおれ達がどんな御咎を受けようも知れまいに……。這奴、あきれ返つた圖太い野郎だ。さあ、切支丹の牢破りめ。正直に白狀しろ。

（曾平次は七助の横面をなぐり、その襟髪を取つて捻伏せる。）

七助。　恐れ入りました。おそれ入りました。

曾平次。　恐れ入つたら白狀しろ。

七助。　申上げます、申上げます。

（この騒ぎに女牢の朝妻もむき直りて、格子越しに樣子をうかがふ。今まで眠れるが如くなりしハンも徐かに頭をあげて、この體をじつと視る。）

七助。　もう斯うなつたら、なにも彼も申上げます。實は去年の暮からこの切支丹屋敷にあげられて、暗いところに投り込まれてゐましたが、時候がおひ〳〵に春めいて來て、さぞ今頃は花見のなんのと、世間の人は物見遊山に毎日浮かれてゐるだらうと思ひまするれば、急に浮

世が戀しくなつて、一昨日御白洲へよび出された歸りに、お庭の隅でこんな折釘を拾つたのを幸ひ、一生懸命に磨いて尖らして、牢の格子を切破らうと巧んだに相違ございませぬ。

伊織。　それほどまでに浮世が戀しいか。

七助。　唯今も申す通り、暖かい春風がふいて來て、格子ひとへの牢屋の外では、花が咲いたり鳥が鳴いたりするのを、毎日見たり聞いたりしますので、むやみに世間が戀しくなりました。わたくしもまだ若い者でございます。お察しなされてくださりませ。

會平次。　その若い命を縮めるのもおのれの心柄だ。一日も早く改宗して、お上の御慈悲を願へばいいものを、飽までも邪宗門に凝固まつて、揚句の果に大それた牢破りを巧らむなどとはよく〳〵根性ッ骨の突ん曲つた生れぞこなひだ。うぬ等のやうな奴が人間並に花見がしたいもよく出來た。花が見たければ三尺高い木の空から、どこでも勝手に眺めてゐろ。

七助。　となりにゐる吉原の太夫も、お庭の櫻がみたいと云ふので、花の咲くまでお仕置を延ばして貰つたのではございませぬか。

會平次。　それは又いろ〳〵と譯があるのだ。(伊織を見かへる)いや、それは其、神妙にしてゐるから上でも特別の御慈悲を加へてくだされたのだ。うぬ等のやうな圖太い野郎に、御慈悲もお情もあるものか。

伊織。　待て、待て。こゝで爭ふには及ばぬことだ。破牢を企てたる罪人は、白洲へ引出して詮議をせねばなるまい。七助、立て。

七助。　はつ。

伊織。　彌市、其方も立て。

彌市。　わたくしもお調べを受けるのでございますか。

伊織。　相牢の者は同類のうたがひがある。其方も一應の吟味は逃れぬ。ヨハンは病中なれば免し置くぞ。

彌市。　はあ。

會平次。　さあ、きり〳〵歩め。

(伊織は先に立ちて行きかゝり、思はず女牢の方を見かへれば、朝妻はのび上りて格子の間より差覗き、兩人無言にて顔なみあはせしが、伊織はやがて牢の外へ出づ。彌市、七助、會平次もつゞいて出でゆく。外には錠を下す音して、霎時の沈默。やがて朝妻は格子のあひだより窃かに靡をかける。)

ヨハン様……伴天連様……。

朝妻。（徐かに起き直る。）なんぞ用がありますか。

ヨハン。あの、御病氣は如何でござります。

朝妻。日本の役人は碌々に藥もくれません。わたくしは檻につながれた獣と同じやうに、寢床もない板の間に寢てをります。この五六日は水のほかに何にも飲みません。身體はます〳〵衰へるばかりです。日本の土に葬むられるのも近い中であらうと思ひます。

ヨハン。わたくしは、あなたよりもお先へ死ぬのでござります。けふの午すぎにはいよ〳〵死罪になると聞きました。

朝妻。あゝ、あなたはいよ〳〵死罪……。おゝ、今日殺されますか。

ヨハン。伊織様が内々で話してくれました。お仕置は八つとか聞きましたれば、もう半時のひまもござりますまい。

朝妻。櫻の花が盛りになる時は、あなたの命の終る時と、かねて聞いてゐました。

ヨハン。その櫻もきのふ今日が盛りでござります。わたくしもあの木の下で殺されゝば本望でございます。稅吏も遊女も正しき教を信仰すれば、神の御國へ入ることができると聞いてをります。伴天連様、罪の深いわたくしの汚れた魂が、どうかして神様の御手に救はれまするやうに、お祈りなされてくださりませ。

ヨハン。それは云ふまでもないことです。あなたも最後まで清い心を以て、神様のお救ひを祈りなさい。天にます神様は、パンを求むる者に石をあたへ、魚を求むるものに蛇をあたへるやうな、そんな間違つたお捌きは決してなさりません。善きものを求むる者には、かならず善きものを與へられます。神を疑うてはなりませんぞ。

朝妻。はい。

ヨハン。いや、あなたばかりではない。わたくしも二三日の後には、神様のお傍へ行かれようと思ひます。わたくしは羅馬の都に生れました。今から百五十年ほど前に、羅馬へは日本の大名伊達政宗の使が來て、羅馬法王の御足の前にひざまづいたと云ふことを、小兒のときから聞いてゐました。しかるに日本ではその後切支丹宗門を邪教と唱へて、何人もこの宗門に入ることを禁じました。羅馬、西班牙、葡萄牙から渡つて來た伴天連や伊流滿はみな殺されました。日本人の信徒も澤山に殺されました。あるものは生きながら火に燒かれた。あるものは水に投げ込まれた。わたくしが今度日本へ渡るについても、母や妹は大層に心

配してゐました。親切な友達は危いところへ行くことを止めろと意見してくれました。けれども、切支丹宗徒を苦めるのは、日本ばかりではありません。わたくしの生れた羅馬でも、むかしは切支丹宗徒に對して非常に殘酷な刑罰を加へた時代もありました。今もむかしも同じことで、教のために身を殺すのは、われ〳〵の務です。わたくしは昔の尊い殉教者のあとを履んで、名譽の冠を頭にいたゞく覺悟で、親や兄弟や友達にも最後のわかれを告げて、遠い遠い海を渡つて、九州の長崎へ着きました。その航海の途中でも、幾たびか怖ろしい風雨にも逢ひました。海賊の船にも襲はれました。それでも幸ひに神の助けによつて、無事に日本の土を踏むやうになつたのは、八年前の春でありました。

朝妻。　長崎へお着きになると、すぐにお召捕になつたのでございますか。

ヨハン。　いや、わたくしは自分の使を果さずに、すぐに捕はれることを好みませんでした。日本の役人の目を逃れるために、ある時は山の奥にかくれて木の實を拾つて生きてゐました。ある時は海岸の岩の洞穴に住んで、名も知れぬ海草や貝をあさつて生きてゐました。夜になると窃と忍んで出て、暗い森のなかや寂しい濱邊に信者をあつめて、わたくしは熱心に神の教を說きました。わたくしは日本の詞は下手でしたが、日本の信者は涙をながして聽いてゐました。わたくしはそれから天草へ渡りました。

朝妻。　おゝ、天草へもお出でなされましたか。

（ヨハンは病苦を忘れたるがごとく、眼をかゞやかしてあなたを打視やる。）

ヨハン。　その時はわたくしの一生のうちで、最も忘れられぬ愉快の時でした。（打笑む。）時候は八月のなかばで、海は毎日暴れてゐましたが、わたくしは毎晩毎晩濱邊の砂のうへに立つておそろしい浪の音と鬪ひながら、大きな強い聲で說教しました。八十年以前にこの天草と島原には、三萬八千人の殉教者があつた。この人々はあかい血の洗禮を受けて、いづれも神の御國へ救はれたことを說きますと、男も女も小兒もわたくしの着物の裾に縋つて、聲をあげて泣きました。眞暗な海には……（少しく考へる。）おゝ、不知火、不知火……。神の光のやうな火が澤山に燃えてゐました。わたくしは何とも云へぬ尊い感じに打たれて、しばらくは口も利けませんでした。（斯く云ひ來りて思はず一息つく。）かうして二月ばかりを送つてゐるうちに、或者がわたくしを訴人しました。伴天連を訴人すれば五百兩の褒美が貰へるのです。わたくしは日本の役人に捕はれて、放火や人殺しの罪人よりももつと〳〵殘酷な取扱ひをうけながら、長崎から江戸へ送られました。この切支丹屋敷の奉行は、わた

くしの手から經文を奪ひました。十字架を取上げました。それから碌々に吟味もせずに、牢のなかへ投げ込んでしまつて……もう七年ほどになります。おそらく一生押籠めて置くつもりであらうが、その一生も……もう長くはありますまい。遅くとも五日か七日……早ければ二日か三日のうちには、わたくしは自分の役目を果して……今の苦みを逃れることが……出來るであらうと……思ひます。

（云ふうちにヨハンは次第に息弱りて、胸をいだきつゝ喘ぐ。朝妻は格子に縋りて氣づかはしげに差覗く。）

朝妻。　もし、ヨハン様……。どうぞなされましたか。お心持が悪うございますか。

（ヨハンは答へず、唯呻くのみ。朝妻は伸上りつゝうろ〳〵する。）

朝妻。　もし、ヨハン様……。お氣をたしかにお持ちなされませ。御介抱が致したくても、お傍へはゆかれませぬ。生憎そこには誰もゐず……。せめて水でも差上げたいが……。もし、牢番のお人はおいでなされぬか。牢番のお役人様……。

みつの。　牢番のお役人様……。お願ひでございます。

朝妻。　お願ひでございます。

（ふたりは正面の格子をたゝきて呼ぶ。三五郎出づ。）

三五郎。　（格子の外より。）なんだ、なんだ。さうぐ〳〵しい。

朝妻。　あのヨハン様が御病氣でございます。

三五郎。　病氣は今始まつたことではないのだ。

朝妻。　それでも大層お苦しさうでございます。なにかお藥でも……それが叶はずばせめて水でも差上げてくださりませ。

三五郎。　えゝ、餘計な世話をやく奴だ。あんな奴等は一人でも早く滅つた方が始末がいゝのだ。

朝妻。　でも、あの通り切なさうに唸つておいでなされます。

三五郎。　唸らうと吠えようと勝手にするが可い。どうで牢のなかで死ぬくらゐの奴だ。些とぐらゐの苦みは當りまへだらうよ。

朝妻。　もし、お役人様。わたくしは愈よお仕置がきまつて、もう半時とは經たぬ間に、死罪に相成る身の上でございます。いかなる罪人でも最期の際には、一つの願ひは聞きとゞけて下さるが、お上の御慈悲と聞きました。貴様の願ひはもう肯いてあるぞ。

三五郎。

朝　妻。　それでも最後の願ひは格別、どうぞあのヨハン様に水を一杯差上げてくださりませ。これがわたくしの最後のお願ひでございます。

（朝妻は手をあはせて頼む。）

三五郎。　うるさい奴だな。よし、よし、最後の願ひとあれば肯いてもやらうが、度々はならぬぞ。

（三五郎去る。）

朝　妻。　ヨハン様……。さぞお苦しいでございませうが、唯今水を持つてまゐります。もう少し我慢なされませ。あなたにはまだお願ひがございます。どうぞお氣を確にお持ちくださりませ。ヨハン様……。

みつの。　ヨハン様……。

（二人は格子に取付きて呼ぶ。男牢の錠を外して、三五郎は茶碗に水を入れて持ち來り、こなたの二人を見かへる。）

三五郎。　えゝ、まだ騒いでゐるのか。靜にしろと云ふのに……（ヨハンの枕もとに茶碗を置く。）さあ、水を持つて來たぞ。禮をいつて飲むが可い。

（ヨハンは唯呻くのみ。）

朝　妻。　ありがたうございまする。

三五郎。　もうこれぎりだぞ。二度と申すな。

朝　妻。　はい。

（三五郎は出でゆく。）

朝　妻。　さあ、水を汲んでまゐりました。早うお飲みなされませ。

（ヨハン少しく身を起して、慄へる手に茶碗を取りて一口のみ、ほつと息をつく。）

朝　妻。　御氣分はいかゞでございます。

ヨハン。　水を一口飲んだせゐか、息苦しいのも少し鎭まつたやうであります。あなたは今日死ぬ……わたくしは明日か今晩死にませう。

朝　妻。　生きらるゝだけは生きるのが人間の務だとか聞きました。どうぞわたくしの亡い後もせいぐ〳〵御養生なされませ。

ヨハン。　人間の死を悲むのは人情でありますが……暗い牢屋の扉が開かれて、はじめて自由の身になるかと思へば、最期の時が却つて待たれるやうにも思はれます。あなたばかりではない、わたくしばかりで無い。この切支丹屋敷には昔から名もない殉教者の骨が澤山に埋めてあ

ります。その人々はみんなこの暗い牢屋に長い間つながれて、神の救ひを求めながら死んだのです。あなたも一心に神の御名を唱へて、冥土の使を待たれるがよろしい。

朝妻。　その使もだん〳〵に近いてまゐります。時刻もおひ〳〵に迫つて來ました。就きましては最期の際に懺悔が致したうございますが……。

ヨハン。　おゝ、それでこそまことの信者であります。わたくしは唯今それへ參ります。

（ヨハンは起たんとしてよろめく。）

朝妻。　お危なうございます。

（ヨハンは蹌蹌きながら歩みゆき、格子を隔てゝ、朝妻と相對すれば、朝妻は謹んでひざまづく。ヨハンは形を正して立ち、指にて朝妻の頭のうへに十字を畫きし後、嚴然たる聲音にていふ。）

ヨハン。　日本の遊女朝妻、今は神の子たる朝妻……。天にまします父に代りて、おん身に尋ぬることがある。神のおん前に於て懺悔の川意はあるか。

朝妻。　はあ。何事も打ちあけて懺悔いたしまする。

ヨハン。　一々に申せ。

朝妻。　廿年の月日のあひだ、この身に負へる罪科は申すもなか〳〵怖ろしうございまする。

ヨハン。　なかにも心にかゝることは……。

朝妻。　十六歳の春より廓に身をしづめて、夜毎夜毎にあまたの男を迷はしました。花の香を慕ふ胡蝶のやうに、うか〳〵と迷つてくる若い男老いたる男をあざむく方便として、ある時には髪の毛を切つて、偽りの誓を立てました。ある時には指の血を染めて、いつはりの文を書きました。

ヨハン。　まだほかには……。仇も恨も忘れねば、神の御國へはゆかれぬぞ。おん身を訴人したものを恨む心はないか。

朝妻。　わたくしの許へ繁々通うてくる若い商人がございましたが、心に染まぬ男なれば、いつも情なく扱うてをりました。男はそれを恨みに思うて、朝妻は邪宗門の信者であると、訴へて出たのでございまする。

ヨハン。　その男が憎いか。

朝妻。　はい。

ヨハン。　恨めしいか。

朝妻。　はい。

ヨハン。今となつてもそのやうな憎み恨みを懐くは、迷ひのいまだ醒めぬ證據ぢや。恨みを捨てよ、仇をわすれよ。

朝妻。はい。

ヨハン。まだほかに……。この牢屋をあづかる若い武士を、おん身は戀ひ慕ふ心はないか。

朝妻。え。

ヨハン。神の御前であるぞよ。いつはらずに申せ。おん身はひそかに彼の男を慕うて居らうが……。

朝妻。恐れ入りましてござりまする。彼の武士はわたくしに心をよせ、改宗せよと幾たびか說き勸めました。

ヨハン。その情にひかされて。おん身も心が迷ふたか。

朝妻。戀に心が眩みまして、幾たびか暗き方へ迷ひ入らうかとも致しましたが、尊い神のひかりに照されて、幸ひに正しき道を履んでまゐりました。

ヨハン。最期の際にも彼の男が戀しいか。

朝妻。はい。

ヨハン。戀を捨てよ。執着を忘れよ。彼の男はおん身の信仰をくつがへし、清き女子を地獄へ墮さうとする惡魔であると思へ。

朝妻。はい。

ヨハン。なほ最後に問ふことがある。おん身は罪なくして死罪に行はるゝを、殘念とも口惜しいとも思はぬか。

朝妻。殘念とも口惜しいとも思ひませぬ。このうき世を捨てまするも、神の御惠と存じてをりまする。

ヨハン。よし。この上は心を殘さずに最期の時のいたるを待て。ひとに命を奪らるゝと思うてはならぬ。みづから進んで祭壇に命をさゝぐると思へ。今おん身が流す血を以て、われと我身の罪や汚れを一切洗ひきよむると思へ。清き最期の一念により、この世の罪はみな亡びて、靈魂は天の御國へ導かるゝであらう。かならず疑ふな。

朝妻。はい。

（朝妻はつゝしんで拜す。ヨハンは彼の茶碗を見かへりて、踰躇きながらこれを持ち來る。）

ヨハン。牢屋の内なれば何事も思ふにまかせぬが、この茶碗の水を羅馬法皇より賜はりし神の酒と心得て、ありがたく頂戴いたせ。

切支丹屋敷

（ヨハンは茶碗をいたゞきて格子のあひだより差出せば、朝妻はうけて押頂き、うや〳〵しく飲む。この時、男牢の錠をあける音して、彌市は曾平次に送られて入り來る。）

彌　市。　唯今戻りました。

ヨハン。　もう一人はどうしました。

彌　市。　（憤然として。）七助めは惱い奴……惡魔でござりまする。

ヨハン。　あの人が何うしましたか。

彌　市。　奉行の見るまへで……キリスト樣の畫像を蹈みました。

朝　妻。　え。キリスト樣の御姿を……。

ヨハン。　むゝ。

（ヨハンは歎息す。曾平次はあざ笑ふ。）

曾平次。　あの七助といふ奴は流石に人間らしいところがあると見えて、御奉行樣の見る前ですつかり改心してしまつた。

朝　妻。　え。

曾平次。　おゝ、切支丹の邪宗門は今日かぎりで改めますと、立派に誓つた。その證據にはこれを蹈んでみろと、キリストの像を突き付けたら、あいつは土足で斯う蹈んだ。（足をあげて蹈む眞似をする。）

朝　妻。　おゝ。

曾平次。　二度も三度も蹈んで、蹈んで、蹈みにじつた。

（曾平次は幾たびか蹈む眞似をする。かれが床板を蹈むたびに、三人は身に堪へ、ヨハンは格子にすがりて眼を瞑づ。）

朝　妻。　聞いても悚然とするやうな。思へば〳〵罪の深い、おそろしいことでござりますな。

彌　市。　話で聞いてさへも怖ろしいものを、現在その場で見てゐた私の心は……。あまりに勿體ないやら、おそろしいやらで、わしは思はず眼を塞いでゐました。

曾平次。　はて、なにが勿體ない。勿體ないと云ふことを知つてゐるなら、貴樣達もこれから根性を入れかへて、阿彌陀樣や如來さまを拜め。あの七助は素直に改宗したのを、上にも神妙におぼしめされて、牢破りの罪も切支丹の罪も一切ゆるされ、これでやう〳〵浮世の暖い風にふかれますと、籠を出た鳥のやうに喜んで、羽をひろげて唯つた今、御門から飛んで出て行つたぞ。（彌市に向ひて。）貴樣は强情を張つてゐるから、相變らずこの始末だ。あの七

彌　市。　助が羨ましくないか。

赦されたものが羨ましいか、赦されぬものが羨ましいか、こなた達には判るまい。わし等の心は神様がよく御存じぢや。

弁平次。　曳かれ者の小唄でへらず口をきくな。もう軈て八つ時に間もあるまい。そつちの女が首の座に直る時刻が來るのだ。どれ、そろ〳〵と支度をしようか。色々と手數をかける奴等だな。(呟きながら出てゆく。)

彌　市。　あの七助といふ奴は、しきりに浮世を戀しがり、牢を破つて逃げようと巧んだほどの奴だから、命が惜しさに改宗して、キリスト様の畫像を土足にかけ、この世で人間の罰は逃れたが、未來の天罰はのがれまい。やがて地獄の火に燔かるゝは眼のあたりぢや。

朝　妻。　それも畢竟信仰が薄いからでござりますな。

ヨハン。　あの人は、この世に生れて來ない方が仕合せでありました。

(三人は顔を見あはせて歎息す。牢屋の下の方にて唄の聲きこゆ。)

唄『咲いた櫻になぜ駒つなぐ、駒が勇めば花が散る。

(ヨハンは苦しげにそこに坐す。朝妻と彌市は唄に耳をかたむける。)

彌　市。　あの唄の聲は牢番の老爺らしいな。

ヨハン。　仕置の支度をしてゐるのではありませんか。

(みつのは格子より外を覗く。)

みつの。　あれ、あれ。あのおぢいさんが櫻の木の下に莚を敷きました。

彌　市。　鼻唄を唄ひながら、人を殺す支度にかゝつてゐるのか。

みつの。　仲間衆が手桶に水を汲んで來ました。

朝　妻。　これ、みつの。こゝへ來や。

みつの。　あい。

朝　妻。　さつきからも聞く通り、わたしはこれからあの櫻の木の下へひき出されて、お仕置にならねばならぬ。お前はなんにも知らぬ幼い身であれば、おそらく上にもお構ひなく、わたしの仕置の落着次第、あしたにも御赦免になるであらう。由ない姉女郎を持つた爲めに、いかい苦勞をさせました。

みつの。　いえ、いえ、わたしはいつまでもお前の傍にゐたい。廓へ歸るのは忌でござんす。

朝　妻。　忌と云つても歸らねばなるまい。首尾よく年季のあけるまでは、自分のからだでも自分の

自由にはならぬ廓の奉公、せいぐ身體を大事にして一日も早く苦界を出るように心がけねばなりませぬぞ。

みつの。　それでも廓へ歸つたら、又遣手のおばさんに抓つたり叩かれたりするでござんせう。いつまでもこゝにゐた方が優でござんす。

彌　市。　この兒は孤兒ぢやとか聞きました。をさない時から二親に別れて、色里の禿奉公……。

ヨハン。　もし、ヨハン樣。いぢらしいものではござりませぬか。

　　おゝ。これ、こゝへ……こゝへ……。

　　（ヨハンは格子より手を出す。みつのは進み寄る。ヨハンはその手を取る。）

ヨハン。　お前はいつまでもこの牢屋にゐた方が、却つて幸ひかも知れません。お前が廓へかへるのを、わたくしは深く悲しみます。併しこれも神樣の御指圖とあきらめて、自分のゆくべき道をまつすぐ履んでゆくがよろしい。人はどんな墮落のどん底に沈んでも、自分の心さへ清く正しくあれば、かならず神樣の救ひを得るものです。わかりましたか。

みつの。　あい。判りました。

ヨハン。　朝妻さん。あなたとももう別れねばなりますまい。

朝　妻。　はい。いろ〳〵と厚いお世話になりました。

　　（朝妻もヨハンの手を取りていたゞく、女牢の鎖をあけて伊織入り來る。）

伊　織。　朝妻。もはや時刻と相成つたぞ。

朝　妻。　はい。

伊　織。　太刀取りの役は拙者に仰せ付けられた。

朝　妻。　え、お前さまが太刀取りに……。

伊　織。　（歎息する。）役目なれば是非がない。拙者の刀で其方を切らねばならぬ。

朝　妻。　御親切にそむいた女を、見事にお手にかけて下さりませ。わたくしも嬉しう存じます。

伊　織。　拙者の手にかゝつて死にたいか。

朝　妻。　それが本望でござります。

　　（二人は顏を見あはせ、伊織はじつとなる。風の音きこゆ。みつのは外を見る。）

みつの。　あれ、あれ、風が吹き出して、櫻の花が雪のやうに散つて來ました。

伊　織。　もはや時刻だ。猶豫はならぬ。朝妻、立ちませい。

朝　妻。　はあ。

（朝妻起ち上りしが、又立戻りてひざまづく。）

朝妻。ヨハン様……彌市殿……。

ヨハン。彌市。　おゝ。

朝妻。もうお別れでございます。

（朝妻は一禮して起ち上り、伊織に從ひてゆかんとす。みつのは追ひ縋る。）

みつの。姉さま……。わたしを置いて行かしやんすか。

朝妻。おゝ。

（朝妻はみつのを抱へて立止まる。伊織は引分けて朝妻を連れゆく。みつのは又縋らんとするを、伊織は押退けて、外より扉をしめる音。みつのは格子にすがりて見送る。こなたの彌市も見送る。ヨハンは默禱す。）

彌市。隔てのこの格子が邪魔になつて、こゝからはよくも見えぬが……これ、禿衆。姉様はどうしてゐるな。

みつの。姉様は櫻の木の下にひき出され、五六人のお侍が取巻いてをりまする。

彌市。むゝ、それからどうした。

みつの。姉様は眼隱しをして……莚の上に坐りました。

彌市。むゝ。

みつの。あれ、あれ、今のお侍が刀をぬいて……。

ヨハン。おゝ。

（ヨハンは思はず起つて格子に縋る。）

みつの。あれ、姉様は……。

彌市。むゝ、切られたか。

（みつのはわッと泣き伏す。ヨハンはよろめきて倒れんとするを、彌市はあわてゝ抱きとめる。ヨハンは額に手をあてゝ、頽るゝごとくに坐す。牢格子のあひだより櫻の花は雪のごとくに亂れて吹き入る。八つの鐘きこゆ。）

――幕――

俳

諧

師

大正十年十月作。

大正十一年三月。新富座初演。

初演當時の役割――鬼貫（中村吉右衛門）路通（守田勘彌）お妙（中村時藏）お留（市川紅若）

登場人物――俳諧師鬼貫。路通。鬼貫の娘お妙。左官の女房お留。

元祿の末年。師走の雪ふる夕暮。浪花の町はづれ、俳諧師鬼貫のわび住居。軒かたむき緣朽ちたる破ら家にて、上の方には雪にたわみたる竹藪あり。下の方の入口には低き竹垣、小さき枝折戸あり。となりは墓場の心にて、矢はり低き竹垣をへだてゝ其内に雪の積りたる石塔又は卒塔婆などみゆ。雪しづかに降る。寺の木魚の音きこゆ。

（下の方より近所の女房お留、竹の子笠をかぶりて出づ。）

お留。 あゝ、よく降ることだ。寒い、寒い。（枝折戸をあけて塵をかける。）もし、御めんなさい。お留守ですか。

お妙。 はい、はい。

（奥より鬼貫の娘お妙、十七八歳の美しき娘、やつれたる姿にて、煤けたる行燈を點して出づ。）

お妙。 おや、おかみさん。まあ、どうぞおあがり下さい。

お留。　なに、こゝでいゝんですよ。（笠をぬぎて條に腰をかける。）寒いぢやありませんか。

お妙。　ほんたうにお寒いことでございます。（表を見る。）今夜も積ることでございませう。

お留。　二日も降りつゞいた上に、まだ積られてはまつたく遣切れませんね。年の暮に斯う毎日降られては、どこでも隨分困ることでせうよ。

お妙。　なにしろ、おあがりなさいませんか。そこはお寒うございますから。

（云ひながら下の方の爐を見かへれば、爐には火の氣がないので、お妙は困つた顏をしてゐる。）

お留。　（それと察して。）いえ、もうお構ひなさるな。内の人もこの寒いので、持病の疝氣が起つたとか云つて、きのふも一昨日も仕事を休んでゐたのですけれど、もう數へ日になつて來て、お出入先から毎日の催促があるので、今日はたうとう朝から仕事に出て行つたんですよ。

お妙。　この降るのに、まあ。

お留。　尤も家のなかの繕ひ仕事ですから、雪が降つても出來るには出來るんですがね。それでも左官といふ商賣は辛いものだと濕し拔いてゐるんですよ。そりやまあ寒いときに泥いぢりをするんですから、どうで樂な仕事ぢやありませんけれど……。

お妙。　（身にしみるやうに。）そりや全くでございますわねえ。

お留。　さう云つても、我慢して稼いで貰はなければ、今日が過されませんからねえ。こちらのお父さんは今日はお休みですか。

お妙。　いゝえ、今もおつしやる通り、やつぱり我慢して出て貰はなければなりませんので、今朝から稼ぎに出かけましたが、この雪では嘸ぞ難儀であらうと案じてをります。

お留。　このお天氣ではほんたうにお困りでせうねえ。その代りにこちらの御商賣なぞは、かういふ日の方が却つて可いかもしれませんよ。

お妙。　（愁はしげに。）どうでございませうか。

お留。　なにしろ、もう歸つてお出でなさるだらうから、早く火でも起して置いてあげたら何うです。外は隨分寒うございますよ。

お妙。　さうでございませうねえ。（再び爐の方を見かへる。）

お留。　（それを察したやうに又うなづく。）いゝえ、どこでも焚物には困るんですよ。この頃のやうに炭や薪が高くなつては、その日暮し同樣の者はまつたく凌げません。それで、實はね。（聲を低めながら惡場を指さす。）わたしもあすこへ焚物を見つけに來たんですよ。

お妙。　あすこへ……。（伸上りてのぞく。）

お留。　あのお墓の古い塔婆を少し貰はうと思つてね。

お妙。　お寺で呉れますかしら。

お留。　（笑ふ。）呉れるもんですか。どうで呉れないに決まつてゐるから、默つて貰つていくんですよ。

お妙。　まあ。

お留。　だつて、お前さん。さうでもしなければ、この大雪の日に凍え死んでしまふぢやありませんか。佛様だつて大目に見てくれますわ。

お妙。　でも、まさかそんなことは……。

お留。　まあ、默つておいでなさい。こゝの家へも持つて來てあげますから。

（お留は枝折戸の外に出て、あたりを見まはしながら生垣を押破つて墓場に忍び入る。お妙は縁に立ちて不安らしく眺めてゐる。やがてお留は、新しいのと古いのとを取りまぜて澤山の塔婆を引つかゝへて出で、縁先へ引返して來る。）

お留。　ねえ、お前さん。これだけあれば一時の凌ぎはつくと云ふものですわね。雪で濕つてゐるかもしれないが、兎も角もこれだけ置いて行きませうよ。

お留。　こちらなんぞはすぐ隣なんだから、焚物に困つたらいつでも斯うなさいよ。

（お留は塔婆の雪を拂ひながら、その幾本かを縁に置く。お妙はやはり不安らしく眺めてゐる。）

お妙。　でも、おかみさん。

お留。　まあ可いから、お父さんの歸るまでに、早く暖かい火でもこしらへて置いておあけなさいよ。どれ、わたしも早く歸りませう。まあ、御寛なさい。些との間に又積りましたよ。

（笠を持ちて起ち上る。）

お妙。　氣をつけておいでなさい。

お留。　はい、御免なさい。おゝ、降る、降る。

（お留は笠をかぶりて塔婆をかゝへ、挨拶してゆきかゝる時、上の方の竹藪の竹が二三本、凄まじい音して折れる。）

お留。　（驚いて見かへる。）おや、竹が折れましたよ。

お妙。　さつきから撓んで居りましたが、たうとう折れたとみえます。

お留。　この雪ではたまりますまいよ。わたしの家なんぞも小さいから、うつかりすると壓潰されるかも知れない。はゝゝゝゝゝ。

（お留は笠を傾けて去る。ゆふぐれの鐘きこゆ。）

お妙。　あのおかみさんはお墓からこんなものを持つて來て……。（塔婆を見る。）窃と行つて歸して來ようかしら。（起ちかけて又躊躇する。）あゝ、雪が降る。お父さまはさぞお寒いことであらう。

（お妙はじつと思案の末、塔婆にむかひて合掌し、やがて思ひ切つて爐の側へかゝへて行き、それを爐に折りくべて燧石の火を打つ。塔婆は燻りて白き煙がうづまき飛ぶ。表の雪は降りやまず。下の方より俳諧師鬼貫、四十餘歳、導引のこしらへ、頭巾をかぶりて破れたる傘をさし、足駄をはきてとぼ〳〵と歸り來る。お妙は透しみて緣に駈け出る。）

お妙。　おゝ。お父さま。お歸りでございましたか。

鬼貫。　どうもよく降ることだな。

お妙。　さぞお寒かつたでございませう。

（お妙は手つだひて、鬼貫は傘をすぼめ、頭巾をぬぎ、からだの雪を拂ひて内にあがる。）

お妙。　朝から少しも止まないので、お寒くもあらうし、お困りでもあらうと、案じ暮してをりました。

鬼貫。　（爐のそばに來る。）おゝ、爐の火が暖かさうに燃えてゐるな。きのふけふの大雪、外に出てゐるものも難儀だが、内にゐるものも難儀、殊に今朝から焚物は無し、内でもさぞ寒がつてゐるだらうと、おれも内を案じてゐた。

お妙。　この寒いのに焚付はなし、お父さまがお歸りになつたらどうしようかと思つて居りますと、あの左官のおかみさんが……。（少しく云ひ淀みて。）これを持つて來てくれたのでございます。

鬼貫。　内に火のあるのは不思議だと思つてゐたが……。あゝ、これは塔婆ではないか。

お妙。　はい。（もじ〳〵してゐる。）

鬼貫。　（急に顔を陰らせる。）これを左官のおかみさんがくれたのか。

お妙。　はい。

鬼貫。　おまへが自分で取つて來たのではあるまいな。

お妙。　（あわてゝ。）まつたくあのおかみさんが取つて來てくれたのでございます。わたくしもどうしようかと思つたのでございますけれど……。（涙ぐむ。）お父様がさぞお寒からうと存じまして……。

鬼貫。　さうか。（歎息する。）

お妙。　どうぞ御勘辨なすつて下さいまし。（手をつく。）

鬼貫。　今更叱つても仕方があるまい。まあ、湯でも沸す支度でもしてくれ。（やゝ靜かに。）こんなことを再びするなよ。

お妙。　はい。恐れ入りました。

（お妙は眼をふいて、湯を沸かす支度をする。鬼貫はしばらく爐の火を眺めてゐる。）

鬼貫。　お妙。

お妙。　はい。

鬼貫。　米はなかつたな。

お妙。　（澁りながら。）はい。

鬼貫。　（さびしく笑ふ。）いや、聞くまでもない。米櫃に一粒の米もないことは今朝から判つてゐたのだ。おれもそれを知つてゐるから、今日もこの大雪のなかを一生懸命に歩いたよ。（袂より笛を出す。）この笛を吹いて、大阪の町中を……。ふだんはおれの嫌ひな色町の方角まで、根よく流してあるいたが、馴染の薄いものはやつぱり駄目だ。どこでも呼んでくれてがないい。

お妙。　（歎息する。）さうでございませうねえ。

鬼貫。　それでも一軒の小さい米屋でよんでくれたので、隱居らしい老人の腰を揉んで、二十文の錢を貰つて來た。

お妙。　（ほつとして。）それはよろしうございました。

鬼貫。　それからもう一軒、質屋に呼び込まれて二十文、あはせて四十文がけふ一日の稼ぎだ。（財布より錢を出してみせる。）

お妙。　それでもまあ結構でございました。

鬼貫。　（又もや寂しく笑ふ。）結構かもしれない。今の身の上では四十文の錢でも尊い。これがなければ親子二人が飢死だからな。

お妙。　まつたく尊いのでございます。（錢を財布に入れて押しいただく。）

鬼貫。　いや、飢死の方がましかも知れない。おれも以前は大和郡山の藩中で、輕いながらも武家奉公をした身の上だ。若い時から俳諧がすきで、窮屈な武家奉公がどうも面白くないと思つてゐるうちに、おまへが十三の時に女房が死んだ。それから思ひ切つて武士を捨て、稚

いお前の手をひいて、すみ馴れた郡山の土地を離れる時は、おれも流石にさびしいやうな心持がしないでもなかつた。「笠とりて跡ちからなや春の雨」……それからこの大阪へ出て來たが、好きな俳諧を弄んでゐるばかりでは迚も世渡りの道が立たないので、思ひ付いた導引揉療治、これならば兎もかくも親子の口餬ぎはならうと、初めは自分の家に看板をかけて見たが、ひとりも療治をたのみに來るものがないので、仕方が無しに按摩の笛を吹いて、毎日町中を流してあるくのも、かぞへて見るともう足かけ五年になる。家財も着類もみな賣り盡して、殘つてゐるものは親子二人のからだばかりだ。

お妙。（慰めるやうに。）その不足勝のあひだにも、俳諧の道に心をかたむけて、月雪花を樂むのが風流の極意ではございませんか。

鬼貫。（うなづく。）それはおれも知つてゐる。

お妙。清貧を樂むとか、ふだんから仰しやるのは、こゝのことではございませんか。

鬼貫。清貧を樂む……。（みづから嘲るやうに。）おれも今まではさう思つてゐた。さう思へばこそ家代々の祿をすてゝ、自分の好きな俳諧師にもなつたのだ。しかし今のおれ達の身の上は、清貧などといふことを通り越して、あんまり慘め過ぎるではないか。月雪花を樂む風流の極意もこの世に生きてゐればこそで、おれ達はもう生命があぶない。おれ達はその日その日の糧にも困つてゐる。あしたの命もおぼつかないほどに飢に迫つてゐる。むかしの鬼貫ならば、この雪の日には是非とも一句あるべきところだが、今日の鬼貫は歌も俳諧もあらばこそ、どうしたら今夜の米代を稼げるか、あしたの薪代を稼げるか、どうしたら親子ふたりの露命をつなげるかと、唯そればかりに屈託しながら、大雪に埋もれた師走の町を一日さまよひ歩いてゐたのだ。大和も寒いところであつたが、浪花の冬も身にしみるな。

（お妙はうつむきて悲しげに聽きゐたるが、やがて湯の沸きたるに心づきて、茶碗につぎて父にすめる。鬼貫は徐かに湯をのみて又考へる。）

鬼貫。おゝ、さうだ。たしか去年の暮であつた。やつぱりこんな寒い日であつたが、おれはこの行燈の灯をじつと眺めてゐるうちに、つい一句浮んだ。「ともしびの花に春待つ庵かな」——その頃はおれの心にもまだ餘裕があつて、春を待つといふ樂みがあつたと見える。その樂みも今は消えた。

お妙。え。

（お妙はいよ〳〵悲しげに父の顏を見つめる。鬼貫はうつむきて溜息をつく。雪風の音して、竹藪

の竹二三本又もや折れる。その音に鬼貫は顔をあげて庭を見かへる。

鬼貫。竹が折れたな。

お妙。さつきからたび〳〵折れるやうでございます。

鬼貫。これほどの大雪に壓されては、強い竹も流石にたまるまい。堪へるだけは堪へても、積る重荷に壓潰されて、倒れるもある、折れるもある。（じつと思案して氣を換へる。）これお妙。今夜の米を買つて來なければなるまいな。

お妙。ほんにさうでございます。これからすぐに行つてまゐりませう。

鬼貫。油はどうだな。（行燈を見かへる。）いや、四十文の錢で色々の買物も出來まい。油が盡きたら雪あかりでも事は濟む。兎も角もその錢で米と青菜でも買つて來い。

お妙。はい、はい。

（お妙は財布を帶にはさみて起ち上り、奥より風呂敷を持ちて出づ。）

鬼貫。あゝ、いつまでも降ることか。日が暮れて路が悪い。氣をつけて行けよ。

お妙。はい。氣をつけてまゐります。

（お妙は父の破れ傘を持ち、着物の褄をからげて、素足にて雪のなかを行きかゝる。）

鬼貫。これ、素足では冷たからう。穿きにくからうが、おれの足駄を穿いてゆけ。

お妙。（少し躊躇して。）何、すぐそこでございますから……。

鬼貫。すぐそこでも素足では堪るまい。構はずに穿いてゆけ。

お妙。では、拜借してまゐります。

（お妙は父の足駄をはき、傘をかたむけて下の方に立去る。雪風の音。鬼貫は立つて緣先より娘のうしろ影を見送りゐたるが、やがて行燈をよきところに直して、小さき古机を持出し、しづかに蜂を執りて懐紙に何か書きはじめる。雪の音、木魚の音。下の方より俳諧師路通、三十餘歳、乞食の姿にて破れたる菰をまとひ、古手拭をかぶりて出づ。）

路通。（門よりのぞく。）この雪の日に難澁いたすものでございます。どうぞお慈悲に一文遣つてください。

鬼貫。（書きながら見かへる。）氣の毒だが難澁はお互ひの身の上で、一錢の施しも出來ない。どこか外の家へ行つてくれ。

（云ひすてゝ鬼貫は矢はり書きつゞけてゐる。路通は伸びあがりて内を覗き、なにか考へながら下の方に立ち去る。鬼貫はやがて書き終りて筆を措き、叮嚀に紙をたゝみて机の上に置く。それより

押入をあけて袋に入れたる脇差を取出し、鞘をはらひて行燈の灯に照し視るとき、下の方よりお妙は風呂敷包みをかゝへて歸り來り、門口より内をのぞきて俄にたちどまり、不安らしくうかゞひゐる。鬼貫は破れたる半屏風を逆に立てまはして、その蔭に這入る。その途端にお妙は傘も包みも投げ出して内へ駈けあがり、屏風を押倒して父の手に取りすがる。

お妙。（聲をふるはせる。）お父さま。どうなさるのでございます。

鬼貫。お妙。もう歸つたのか。

お妙。こんな刄物を持つて、お前はどうなさるのでございます。

鬼貫。譯はそこに書いてある。それを讀めば判ることだ。

お妙。いゝえ、そんなものを讀んではゐられません。もし、お父さま。おまへは何で自害なさるのでございます。

鬼貫。叱つ、靜にしろ。

お妙。いゝえ、靜には出來ません。まあ、兎も角もその刄物をお渡しください。

（たがひに爭ふ間に、下の方より路通は再び出で來り、門口よりうかゞひゐる。お妙は一生懸命に父の手より刄物を奪ひとりて泣く。）

鬼貫。これ、靜にしろと云ふのに……。なるほど吃驚するのも道理だが、たとひ自害しないでも俺達はもう生きてはゐられない……。よく考へてみろ。さつきも云ふ通り、あしかけ五年の浪々に、わづかばかりの貯へは勿論、家財も着類もみんな賣り盡して、導引揉療治にまで身を落したが、それでも世渡りは出來ないで、先月から三度の飯も滿足に食つたことがない。これで幾日もつゞいたら、親子ふたりが抱きあつて飢死するより外はあるまい。考へてみても怖ろしいことだ。

お妙。飢死するのが怖ろしさに、いつそ自害すると覺悟したら、なぜわたくしにも打ち明けて下さいません。お前に捨てゝ行かれたら、あとに殘つたわたくしは何うなると思ふのでございます。やつぱり飢死するより外は無いではございませんか。（泣く。）

鬼貫。いや、おまへと俺とは違ふ。お前はまだ若い身の上だ。いつそ自分一人ならば、どこへ奉公しても生きてゐられる。決して飢死するやうな心配はない。あの書置を人に見せれば、心ある人は憫れんでもくれるだらう。おれも好んで死にたくはない。それで今日まで我慢に我慢をして來たが、ほかの事とは譯が違つて、人間がどうしても食へないとなれば、死ぬよりほかに仕樣がない。生きたいと云つても生きてはゐられないのだ。判つたか。

お妙。いゝえ、どうしても死ぬほどならば、まだ生きてゆく道があらうかと存じます。唯今のお話をうかゞひますと、わたくしをお救ひ下さるために、お父さまが命をお捨てなさるやうに思はれまして、あんまり悲しうございます。わたくしはそんな不孝者になりたくはございません。かう云ふ時には、わたくしが死んでお父さまをお救ひ申さねばなりません。

鬼貫。馬鹿なことを……。お前を殺してどうなるものか。

お妙。ほんたうに死ぬのではございません。唯今お父さまは何處へ奉公してもと仰しやいました。その奉公にまゐるのでございます。

鬼貫。奉公にゆく……。

お妙。はい。（決心したやうに涙を拭く。）奉公にまゐります。と云つて、お父さまに御不自由はさせません。わたくしに代つて朝夕のお世話を致すやうな、下女でも下男でもお雇ひ入れなすつて下さいまし。

鬼貫。その日の暮しに困る人間が下女や下男を置く。そんなことがどうして出來ると思ふのだ。（娘の肩に優しく手をかける。）おまへは少し取逆上せてゐる。まあ、まあ、おちついてよく考へるが可い。

お妙。（父の膝に手をかける。）もし、お父様。わたくしは奉公にまゐりまして、お父様に御不自由のないやうなお金を工面いたします。

鬼貫。むゝ。

（鬼貫は膝に落ちぬやうに考へながら、娘の顔をじつと視る。お妙の眼からは涙が流れる。）

鬼貫。（俄に思ひ付いて。）あ、おまへは勤め奉公にでもゆく氣か。

お妙。はい。（父の膝に泣き伏す。）

鬼貫。（あわたゞしく。）いけない、それは不可ない。お前にそんなことをさせられるものか。おれは今まで唯の一度もそんなことを考へたことが無かつた。おれはそんな無慈悲ではないのだ。（娘の手を掴んで叱るやうに。）おまへはどうしてそんな馬鹿な、間違つた考へを起したのだ。おまへが自分ひとりで考へ出したのか、それとも誰かに智慧をつけられたのか。むゝ、あの左官のおかみさんに敎へられたのか。大事の娘に勤め奉公をすゝめるなどとは、彼奴、思ひのほかの不埒な奴だ。

お妙。（父に縋る。）いゝえ、左官のおかみさんの知つたことではございません。誰に敎へられたのでも無く、わたくしが不意と考へ付いたのでございます。

鬼貫。　何日そんなことを考へたのだ。

お妙。　けふの雪をながめながら、お父さまが外で嘸ぞ寒いおもひをしていらつしやいだらうと思ひまして……（泣く。）わたくしのやうなものでも勤め奉公に出ましたら、いくらか纏まつたお金も手に這入らうかと。不意と思ひつきましたその矢先へ、お父様が……（落ちたる脇差に眼をつける。）こんな覺悟をなさいましたので……。

鬼貫。　いや、判つた。なるほどお前の容貌ならば、廓へ身をしづめて相當の金にもなるだらう。おれも樂が出來るかも知れない。併しそんなことがどうしてさせられるものか。

お妙。　お許しはございませんか。

鬼貫。　（又もや激しく叱り付ける。）えゝ、念を押すまでもない。たとひ飢死をすればとて、わが子に遊女の勤めをさせるなどとは、以ての外のことだ。これ、よく考へてみろ。おれはお前が可愛ければこそ、自分を殺してお前を生かさうとしてゐるのだ。そのお前を苦界に沈めて、俺がその金で樂々と生きてゐられるか。親の心、子知らずとはお前のことだ。あんまり腹が立つて涙も出ない。おれが奉公しろと云つたのは、たとひ水仕奉公にもしろ、眞直な正しい奉公をしろと云つたのだ。おれは死んでもどうなつても構はない、せめてお前だけは人間らしく生かして遣りたいと、苦勞してゐる俺の心がわからないか。

お妙。　それはよく判つて居りますけれども、わたくしはどうしてもお父様を見殺しにすることは出來ません。

鬼貫。　どうしても身賣をするといふのか。（詰めよる。）

お妙。　（恐れるやうに。）では、わたくしは思ひ切つて身賣を止めませう。

鬼貫。　むゝ、止めるか。それが當りまへだ。

お妙。　その代りお父さまも……。死ぬのを止めて下さいまし。

（鬼貫は默つてゐる。）

お妙。　もし、この通りでございます。（手をあはせる。）

（鬼貫は矢はり考へてゐる。）

お妙。　これほどに申しても聽いてくださらなければ、お父様よりも先に、わたくしが寧そ死んでしまひます。

（お妙はそこにある脇差を取りて、緣先へ走り出る。鬼貫はおどろいて押へる。）

鬼貫。　これ、飛んでもないことをするな。

お妙。いゝえ、死なせて下さいまし。

鬼貫。はて、判らない奴だ。

（二人はたがひに爭ふところへ、路通は枝折戸より入り來りて聲をかける。）

路通。あ、待つてくれ、待つてくれ。

（鬼貫とお妙はおどろいて見かへる。）

鬼貫。（咎めるやうに。）お前は誰だ。なにしに來た。

路通。（笑ふ。）さつき來た物貰ひだよ。

鬼貫。物貰ひ……。

（路通は頬冠りを取る。）

鬼貫。（透して視る。）や、路通か。

路通。久振りだな。

鬼貫。まつたく久振りだ。

路通。その久振りのお客樣が來たのだ。まあ、おちついて話さうではないか。

（路通は緣に腰をかける。鬼貫は早くその双物を納めろと娘に眼で知らせる。不意の客來にうろうろしてゐたお妙も一先づ双物を鞘に納める。）

鬼貫。（なつかしげに。）なにしろ、久しく逢はなかつた。そこは寒い。まあ、こつちへあがつてくれ。

お妙。むさ苦しうございますが、どうぞお通り下さいまし。

鬼貫。（爐を指さす。）こゝには火がある。寒さ凌ぎに早くあたるが可い。

（お妙は立寄つて路通の衾をぬがせ、その雪を拂つて遣る。）

路通。いや、構つてくださるな。（鬼貫に。）なまじひ暖かい火などにあたると、却つてあとが寒い。宿無しはこゝで澤山だ。併しこゝらも隨分積つたな。（庭を見まはし、そこに落ちたる傘と包みとに眼をつける。）や、こゝに色々抛り出してある。

（傘と包みとを拾ひて緣に置く。お妙は會釋して受取る。）

鬼貫。（お妙に。）米を買つて來たのか。

お妙。はい。

鬼貫。丁度よい。青菜の粥でも焚いて、お客さまに御馳走しろよ。

お妙。はい、はい。

路通。それは何よりありがたい。久振りで御馳走にならうかな。

お妙。唯今すぐに支度を致します。（包みを持ちて奥に入る。）

（鬼貫は茶碗に湯を汲んで來て、路通のまへに置く。）

鬼貫。郡山で別れて以來だから、もう足かけ六年になる。そのあとはどうした。

路通。この通りだ。はゝゝゝゝ。

鬼貫。再び昔の姿になつたか。

路通。おれはこの姿で東海道の松原に寢てゐるところを、芭蕉の翁に見つけられて弟子の一人に取立てられたが、人間並の生活はおれの性にあはないと見えて、師匠にさん〴〵叱られた上に、二三年前から再び元の宿無しだ。乞食を三日すれば忘られないと云ふが、まつたくこの方が氣樂でいゝやうだよ。

鬼貫。さうかなあ。（考へる。）それでも生きてゐられるかなあ。

路通。この通り生きてゐるのが論より證據だ。しかし俺はおれで、おまへに俺の眞似は出來ない。かうして平氣で生きてゐられるのは、この路通ばかりだらうな。

鬼貫。（感心したやうに。）さうかも知れない。

路通。おまへは斯うして湯をくれたが、おれは滅多にこんなものを飲んだことはない。喉が渇けばすぐにこれだ。

（路通は庭の雪を手に掬つて飲む。）

鬼貫。腹の減ることはないか。

路通。あるな。一日に一度ぐらゐしか食はない時がある。方々の家の門に立つても一文の錢だつて容易に惠んでくれるものではない。現にこゝの家でも斷られたからな。（笑ふ。）

鬼貫。それはお前と知らなかつたからだ。堪忍してくれ。

路通。斷られるのは馴れてゐるから、さのみ驚きもしなかつたが、どうも聞覺えのある聲だと思つたから、また引返して來てみると、いや大變な騒ぎで、いくら無頓着のおれもこれには流石に驚いたよ。鬼貫といふほどの風流人が何っも無分別なことだな。

鬼貫。無分別と云はれても仕方がない。おれはもう切端詰つたのだ。

路通。それが無分別だといふのだ。切端詰つたと云つても、なんとか生きてゆく道があるだらう娘の方がおまへより些と利口のやうだ。

鬼貫。（少しく激して。）おれは自分の娘を賣つても生きてゐようとは思はないのだ。

路通。（笑ふ。）まあ、おちついて聽くがいゝ。誰がおまへの娘を賣れと云つた。おれはこの通りの獨り者だが、たとひ子供があつたにしても、その子供を賣飛ばして金にするといふ無慈悲な料簡にはなれさうもない。おまへの心は俺にもよく判つてゐるよ。

鬼貫。おまへも察してくれるか。

路通。むゝ、察してゐる。そこで、おまへも命を捨てず、娘も身を賣らず、無事安穩に生きてられる智慧を授けてやらうと思ふのだが、どうだ、おれの云ふことをきくか。

鬼貫。おれも死なず、娘も身を賣らず。（疑ふやうに。）おまへにそんな智慧があるかな。

路通。あるから教へて遣らうといふのだ。一體おまへたち親子が死ぬるとか生きるとか騒いでゐるのも、つまりは食へないからのことだらう。

鬼貫。（うなづく。）まつたくその通りだ。よく〳〵のことだと思つてくれ。

路通。さあ、そこだ。おれは獨り者の上に、人間もほんたうに風流に出來てゐる。第一に乞食剛れてもゐるから、一日に一度ぐらゐしか飯を食はないこともある。いや、その一度も滿足に食へないやうなこともある。それでも些つとも驚かないやうに仕込まれてゐるが、おまへ達は素人だ。唯の人間だ。腹の蟲が意氣地なく出來てゐるから。一度も飯を食はせないとすぐにぐう〳〵泣き出すといふ始末だ。おれならこの境涯で平氣でもゐられるが、お前たちには迚もその辛抱は出來まい。おまへ達に取つては腹の減るぐらゐ怖ろしいことはあるまい。そこで、おれが飯を食へることを教へてやる。親子ふたりが滿足に三度の飯さへ食へたら申分はない筈だ。

鬼貫。それは勿論だ。おれだつて別に榮耀や榮華がしたいと望むわけではない。たゞ無事に生きてゐられゝばいゝのだ。

路通。それには斯うするのだ。よく見ろ。

（路通は庭の雪の上に指にて書く。鬼貫は行燈を持ち出して、緣の上から覗く。）

鬼貫。（氣色を變へる。）なんだと思つたら飛んでもないことを……。貴樣はそれだから師匠にも破門されるのだ。痩せても枯れても俺も鬼貫だ。そんな馬鹿なことが出來ると思ふか。

路通。（平氣で。）それが惡いか。

鬼貫。善いか惡いか考へても判るではないか。實にどうも呆れた奴だ。そんな料簡だから貴樣は乞食の味が忘れられないのだ。もう貴樣とは口を利かないから、早く出て行け。

路通。（再び緣に腰をかける。）なにをそんなに怒るのだ。

鬼貫。　えゝ、なんでもいゝから早く出て行け。さあ、出てゆけ。

（鬼貫は路通の腕をつかんで、縁より引卸さうとする。）

路通。　まあ、待つてくれ、待つてくれ。

（鬼貫は縁より下りて路通を引出さうとする。路通は雪のなかに倒れる。）

鬼貫。　早くゆけ。宿無しの乞食野郎め。

（菰を取つて路通に投げつける。路通は頭から菰をすつぽりと被せられて倒れながらに高く笑ふ。）

路通。　はゝゝゝゝ。さう無暗に腹を立つなよ。さういふ馬鹿固い料簡だから、大事の命を安つぽく捨てる氣にもなるのだ。

鬼貫。　なんだ。（縁にある傘を把つて振りあげる。）

路通。　（菰から顔を出す。）まあ、待てといふのに……。おれの云ふことがおまへにはよく呑込めないのだ。

鬼貫。　えゝ、ちやんと判つてゐる。おれに芭蕉翁の偽筆を書けといふのだ、偽物を作れといふのだ。

路通。　さうだ。さうだ。（雪の上に起き上る。）おれの師匠の芭蕉翁の短冊は、廉くも二分や三分には賣れる。相手によつては二兩も三兩も出すかも知れない。ところが、その直筆の短冊といふものが世間に少い。

鬼貫。　それは俺も知つてゐる。

路通。　おまへは能筆だ。武家の出だけに、字をかくことは確かに巧い。そのおまへが芭蕉翁の偽筆をかけば、誰でも屹と一杯食はされる。それ、どうだ。短冊を一枚かけば、少くも二分や一兩にはなる。おまへの導引揉療治とは些と譯が違ふだらうぜ。

鬼貫。　たとひ幾らにならうとも、人の偽筆をかいて金儲けをする。そんな曲つたことが出來ると思ふか。

路通。　それではおまへはやつぱり飢死をする積りか。それとも可愛い娘を賣るつもりか。

路通。　それともむざ〳〵娘を殺して、おまへも一緒に死ぬ積りか。

（鬼貫は矢はり默つてゐる。）

路通。　どう考へても俺の指圖に附いた方が利口らしいな。あゝ、あんまり饒舌つたので喉が渇いて來た。（庭の雪を掬つて再び飲む。）

鬼貫。　幾度云つても同じことだ。おまへのやうな人間を相手にしてはゐられない。頼むから歸つてくれ。（縁にあがる。）

路通。　頼まなくてももう歸るよ。宿無しでも寝るところは何處にかある。久振りで俳諧の話でもしようと思つたら、とんだ喧嘩になつてしまつた。はゝゝゝゝゝ。

鬼貫。　（少し考へる。）むかしのお前なら、昔の俺なら、かう云ふ雪のふる晩に、しんみりとした心持で、ゆつくり俳諧の話でも出來るのだがな。

路通。　今だつて出來るのだが……。まあ、いゝや。これでお別れとしよう。（菰を被て手拭をかぶる。）たしか其角の句にあつたな。「なき骸を笠にかくすや枯尾花」おれの姿もそれに似てるやうだな。

鬼貫。　おれはあんまり好きではないが、江戸の其角はまつたく器用だな。

路通。　些と小細工をするが、彼奴なかくうまいことを云ふよ。

鬼貫。　（釣り込まれて起つ。）おまへは此頃一句もないのか。

路通。　このあひだの晩、長柄の堤の下に寝てゐると、夜中に霜が眞白よ。（坐る。）おれも眼が醒めてびつくりした。そこでつい一句出來たのよ。

鬼貫。　なんといふ句だ。（縁を降りる。）

路通。　「隠れ家や寝覺めさらりと笹の霜」

鬼貫。　「隠れ家や寝覺めさらりと笹の霜」むゝ、面白い、面白いな。（これも思はず雪の中に坐る。）いや、おれもこの間の朝、長柄の堤を通つて一句浮んだよ。

路通。　やつぱり長柄の堤で出來たのか。して、その句は……。

鬼貫。　「川越えて赤き足ゆく枯柳」

路通。　なるほど。（うなづく。）赤き足ゆくが見つけ所だな。面白いな。

鬼貫。　面白いか。

路通。　面白い。かうして見ると、鬼貫はまだ殺したくないな。（笑ふ。）

鬼貫。　死にたくないな。

路通。　いくら喧嘩をしても、おまへと俺とはやつぱり友達だ。あゝ、久振りで面白かつた。（起ちあがる。）どれ、歸らうか。

鬼貫。　もう歸るか。（これも起ち上る。）

路通。　好鹽梅に雪も止んで、薄月が出たやうだ。

（路通は下の方へあゆみ去る。雪を照す月の光青し。鬼貫はあとを見送りて縁に腰をかける。）

鬼貫。　おれは一圖に怒つたが、彼奴はやつぱり好いことを教へてくれたのかしら。

（鬼貫はじつと考へてゐる。ばさ〳〵と雪の落ちる音して、竹藪の撓みし竹は雪をはね返して立つ。）

鬼貫。　（見かへる。）おれも生きることを考へなければならないなあ。

（奥よりお妙出づ。）

お妙。　（そこらを見て。）おや、お客様は……。

鬼貫。　お客はもう歸つた。

お妙。　お粥がやうやく出來ましたのに、もうお歸りになりましたか。

鬼貫。　さうだ、さうだ。むやみに腹を立てたので、粥のことをすつかり忘れてゐた。遠くは行くまい。追掛けて呼び戻して來てくれ。

お妙。　はい、はい。

（お妙はすぐ庭に降りて行きかゝる。）

鬼貫。　（よび止める。）これ、これ、路通に逢つたらばな。粥のことばかりでなく、まだ外にもお話がありますからと云つてな。

お妙。　お話のこと……。

鬼貫。　あの……。（少し小聲で。）短册のことだと云へばすぐに判る。

お妙。　（不安らしく。）お父さま。

鬼貫。　い、から早く行つて來い。

お妙。　はい。はい。

（お妙は出てゆく。鬼貫は彼の書置をひき裂きて爐に投げ込む。月の光あかるく、雪の竹の枒れかゝる音。）

——幕——

大正十二年三月作。

大正十二年五月。新富座初演。

初演當時の主なる役割――熊谷直實、源兵衛（松本幸四郎）熊谷直家（市川壽美藏）河原佐太夫、九郎作（市川左升）李右衛門（坂東壽三郎）權太（市川左團次）おすぎ（市川松蔦）など。

登場人物――熊谷次郎直實。熊谷小次郎直家。河原佐太夫。比企彌五郎。古郡三郎。深谷又八。野口四郎。馬飼權太。狐塚村の源兵衛。念佛李右衛門。世話方九郎作。世話方甚吉。村の娘お杉。お杉の弟猿松。ほかに馬市の馬主。飼主。博勞。熊谷の家來など。

第一幕

武州の熊谷郷、熊谷次郎直實の屋敷内。

源平時代。しかも草深き熊谷郷に住む坂東武者の屋敷とて、きはめて粗朴なる家のかまへと知るべく、平舞臺の下の方に粗末なる納屋あり。納屋の外には秋草など生ひたり。

所々に柿、栗、桐などの大樹ありて、上のかたの奥に屋敷の建物ある心なり。

（治承四年、九月下旬のゆふぐれ。熊谷の家來比企彌五郎と古郡三郎の二人が柿の木の下で落葉を焚き、石や切株に腰をかけて語つてゐる。坂東聲とて、かれちの聲は夕風のうちに一きは高くきこ

（ゆ。遠く砧の音。）

彌五郎。どうぢや、三郎。出陣が遅いなう。

三郎。大方の支度はもう整うたで、二三日のうちには出陣であらう。都のぼりの日が待たるゝぞ。

彌五郎。さうぢや。さうぢや。おれも滅多無性に待佗しうて、なんだか總身がうづくやうで、この頃は夜もおち〳〵とは眠られぬのに困つてゐる。しかし平家とても東海道を安々とは通すまい。途中で二三度の合戰はあらうな。

三郎。合戰と云うても大方は知れたものぢや。畠水練の京勢どもに何がならうぞ。かれらを相手に戰ふのは、武藏野で小鳥狩するやうなものであらうわ。

（上の方より河原佐太夫、六十餘歳、木の枝を杖にしてちんばをひきながら出で來り、二人の問答を聽いてゐる。）

彌五郎。さうは云ふものゝ、平治の合戰には源氏が京勢に追ひまくられたと云ふではないか。

三郎。はて、それはおれ達の生れぬ昔のことぢやよ。

彌五郎。では、やつぱり小鳥狩かな。

二人。はゝゝゝゝ。

佐太夫。（進み出づ。）若い者は威勢がよいな。

彌五郎。おゝ、おやぢか。

（彌五郎はわが腰掛を佐太夫にゆづりて、土にあぐらをかく。三郎は落葉や枯枝を火にくべる。）

佐太夫。九月もやがて末ぢや。あさタは秩父おろしが身にしみて來た。（火にあたる。）今聽いてゐれば、おまへ達はいよ〳〵近いうちに出陣して、東海道で小鳥狩か。羨ましいなう。

三郎。（笑ふ。）羨ましいか。

佐太夫。羨ましい。年は取つても……。（左の足をたゝく。）この足さへ自由ならば、おれも若い者におくれはせぬが、かうなつては意氣地がない。（笑ふ。）これ、些とそこらの栗でも拾うてくれぬか。

（三郎は起つて、木の下に落ちたるいが栗を拾ひあつめて火にくべる。）

彌五郎。さうは云ふものゝ、留守番のおやぢにも大役があるぞ。

佐太夫。ある。ある。それはおれも心得てゐる。これからだん〳〵に寒くなると、秩父の山づたひに熊の奴めが里へ降りてくる。毎年のことぢやが、あのいたづら者にも困つたものぢや。（舌打する。）殊に今年は若い者がみんな出拂つてしまつて、あとに殘るのは年寄や女子供ば

かりぢやから、猶以て油斷がならぬ。（空を見る。）もうそろ〳〵と木の葉が落ちて來たからなう。

（風の音、木の葉散りかゝる。）

三　郎。　熊の奴めも食ひ物をあさりに來るのぢや。山に木の葉のあるあひだは滅多に里へは出て來まいよ。

佐太夫。　いや、さうでない。おれがこの足をやられたのは、十八年まへの丁度今頃であつたよ。それでも其頃にくらべると、今ではいたづら者の出て來るのがよほど少くなつたな。

彌五郎。　昔はそんなに出たかな。

佐太夫。　この土地の名を知らぬか。熊が出るから熊谷、それが論より證據でないか。秩父の方から澤山の熊や狼めが出て來て、そこらを無暗にあらし廻るので、まつたく困り果てたよ。

（下の方より村の娘おすぎ、十七八歳、人をたづぬるやうに見まはしながら出で、奥の方へゆきかかる。）

佐太夫。　（見て。）おゝ、おすぎか。どこへゆく。

おすぎ。　（躊躇して。）あい、あの……。

佐太夫。　はゝ、權太を又よび出しに來たのか。わるい奴ぢや。まあ、こゝで少しあたつてゆけ。

おすぎ。　（恥かしさうに。）あい。

佐太夫。　（笑ひながら。）まあ、こゝへ來いと云ふに……。おれの云ふことをきかぬと、今年の冬は熊に喉はしてしまふぞ。

おすぎ。　え。熊がもう出ましたかえ。（進み寄る。）

佐太夫。　やがて出てくるであらう。おれも内々は待つてゐる。

おすぎ。　え。

佐太夫。　熊といふ奴は飛んでもないいたづら者で、おれをこんな片輪にしてしまつたが、それでもなんとなく可愛いところもある。

彌五郎。　熊が可愛いか。

三　郎。　おやぢも隨分變つてゐるなう。

佐太夫。　あいつあばれ出すと始末におへぬが、おとなしい時にはまつたく可愛い奴で、なにか食ひ物でも遣りたくなる。唄でも歌つて踊らして見たくもなる。寒さ凌ぎに抱いてやりたくもなる。

彌五郎。　馬鹿を云ふな、呆れた熊おやぢぢや。はゝゝゝゝ。

（火のなかの栗がはねる。人々は顔を見あはせる。）

三　郎。　話に浮かれて、栗の燒けるのを忘れてゐた。はゝゝゝゝ。

おすぎ。　わたしがむいてあげませう。

（おすぎは栗を取りて剝く。風の音して、木の葉しきりに降る。）

佐太夫。　急に薄ら寒くなつて來たな。

彌五郎。　寒くなつたら熊を抱くがよいわ。はゝゝゝゝ。

（上の方の奥より深谷又八出づ。）

又　八。　これ、忙しいのに何を遊んでゐる。殿のお召ぢやぞ。

彌五郎。　では、もう出陣か。

又　八。　なんでも明後日頃らしいぞ。

三　郎。　まだ明後日か。待遠しいな。

彌五郎。　それでもたしかに明後日ときまればよいが……。

又　八。　ぐづ〳〵云はずに早く來いよ。

（又八は先に立ちて、彌五郎と三郎もつゞいて奥へゆく。佐太夫も起ちあがる。）

おすぎ。　いよ〳〵御出陣でござりますか。

佐太夫。　どの人も張り切つた馬ぢや。一日を爭つて飛び出したがつてゐる。どれ、どんな樣子か、おれも行つて見て來ようか。

おすぎ。　栗がもう剝けました。（見せる。）

佐太夫。　まあ、よい。おまへにみんな遣るわ。持つて歸つて弟のみやげに遣れ。（ゆきかけて見かへる。）まだそこにゐるのか。むゝ、判つた、判つた。これ、おれを拜むか。

（おすぎは無言で手をあはせる。）

佐太夫。　はゝ、よい、よい。おれが鳥渡呼んで來てやる。しかし今は忙がしい最中ぢや。表へ連れ出してはならぬぞ。

（おすぎはうなづく。佐太夫は上の方に立去る。おすぎは窃と起ちあがりて奥をうかゞひ、持つたる栗のばら〳〵とこぼれるのも知らずにうか〳〵してゐる。砧の音。やがて、上の方より馬飼權太、廿四五歳、あとを見かへりながら足早に出づ。）

おすぎ。　（待ちかねて聲をかける。）もし。

權太。 おゝ、よつほど待たされたか。

おすぎ。 いゝえ。（云ひながら手でまねく。）

權太。 （火のそばに來る。）佐太夫どのが敎へてくれたので、急いで來た。ふだんは隨分口やかましいおやぢやが、やつぱり年をとつてゐるだけに、かう云ふことには思ひやりがあつてうれしい。

おすぎ。 年を取つても、思ひやりがあるとは限らぬ。わたしの父さんなどはむごい事ばかり云ふお人ぢや。（涙ぐむ。）

權太。 いや、それもみんなお前が可愛いからだ。一途にむごいと怨んでは惡いぞ。今度のいくさに平家をほろぼせば、殿樣は勿論御出世で、立派な大名におなりなさるかも知れぬ。それにつれて家來のおれ達も、よい仕合せになるは知れてゐる。さうなれば、おまへの父さんも何でむごい事をいふものか。屹と素直に二人を添はせてくれる。まあ、それまでの辛抱といふものだ。

おすぎ。 さうして、おまへも軍にゆくのでござりますか。

權太。 おなじことを幾度きくのだ。おれは馬飼の役、どこまでもお供をして、殿樣のお馬の世話をしなければならぬ。戰場では馬が大事だ。坂東武者が軍に強いといふのも、みんな良い馬を持つてゐるからのことだ。乘つてゐる人間がどんなに強くても、乘せてゐる馬が自由自在に働いてくれなければ、思ふ存分のいくさは出來ぬ。それを思ふと馬飼は、身分は卑くても大事のお役だ。どうして殿樣のおそばを離れられるものか。

おすぎ。 それは判つてゐるけれど……。今度の軍はなか〳〵の大いくさだといふではござりませぬか。

權太。 （勇ましく。）むゝ、なか〳〵の大いくさであらうよ。なんと云つても、相手は世に時めいてゐる平家の一門、右から左にやみ〳〵と亡ぼされる筈がない。今度の軍はどうしても二年や三年はつゞくであらうと、殿樣も仰しやつた。花の都といふことは、子供の時から聞いてゐるが、おれもまだ見たことがない。その都へ押上つて大いゝさをするのも勇ましからうな。

おすぎ。 その都見物も時による。遠いところへ軍に行つて、お前にもしもの事があつたら……。それを思ふと、わたしは唯なんとなく悲しくなつて、よるも晝も涙がこぼれてならぬ。

權太。 えゝ、不吉なことをいふな。今度のいくさは源氏が勝つと決まつてゐるのだ。

おすぎ。　たとひ軍には勝つたところで、肝腎のおまへが怪我でもしたら……。

權太。　まだいふのか。この通りおれは若い。からだも丈夫だ、足も達者だ。どんなところを駈けまはつても、滅多に怪我などするものか。大丈夫だ。安心しろ、安心しろ。

おすぎ。　あい。

（二人はしばらく默つてゐる。時の鐘きこゆ。）

權太。　もう日が暮れた。内でも案じてゐるであらう。（奥を見かへる。）こんなところでいつまでも話してゐて、誰かに見つけられては惡い。暗くならないうちに早く歸るがいゝぞ。

おすぎ。　おまへはまだ忙しいのでござるかえ。

權太。　おれはまだ厩の御用がある。お馬に糧秣をやらなければならぬ。出陣のまへにはお馬の手入れが猶更大事だ。

おすぎ。　でも、まだ少し話がある。ちよつと外まで來てくださらぬか。

權太。　話があるなら明日にしてくれ。

おすぎ。　あさつてが出陣なら、あしたは猶更いそがしいであらうに……。手間は取らせぬ。まあ、ちよつとそこまで……。（權太の手を把る。）

權太。　はて、今は忙しいといふのに……。

おすぎ。　どうしても忌でござるかえ。（無理にひく。）

權太。　（ひかれながら。）でも、御用がある。今夜は堪忍してくれ。

（この時、下の方の納屋のうちにて物のくづれ落ちる音するに、二人はおどろいて見かへる。）

おすぎ。　あれ、あの納屋のなかで……。誰か隱れてゐるのではあるまいか。

權太。　（かんがへる。）積んである米俵でも頽れ落ちたかな。

（權太は納屋へ進みよらうとする時、納屋の板羽目はがら〳〵と破れ落ちて、大いなる熊が半身をあらはすに、權太もおどろいて立ちどまる。）

おすぎ。　（叫ぶ。）あ、あれ、熊が……。

權太。　おゝ。熊だ、熊だ。あぶないぞ、あぶないぞ。

（權太はあわてゝおすぎを圍ふ。おすぎは顫へながら權太にすがり付く。）

權太。　怖いことはない。おれが今追つてやる。

（熊は納屋を破りて出づ。權太は片手におすぎをかゝへながら、片手に焚火の枝を把り、燃えたまゝにて熊の眼さきに差付くれば、熊は火を恐るゝやうに後じさりしながら唸る。おすぎは權太に

しがみ付いてゐる。熊は權太を附けまはすやうに上の方へ廻つてゆく。權太は思ひ切つて燃えたる枝をふりあぐれば、熊は身を退いて唸りながら、忽ちに身をひるがへして走り去る。

おすぎ。（ほつとして。）あゝ、怖いことであつた。不意におそろしい熊が出て、わたしはどうなることかと思ひました。

權太。まだ冬にもならないのにどうして出て來たか。（上の方を見やりながら餓に心づいて叫ぶ。）や、大變だ。あいつを厩の方へやつては大變だ。（行かうとする。）

おすぎ。（ひき止める。）お前、うか〳〵行つてはあぶない。

權太。えゝ、それどころか。

おすぎ。はて、あぶない。

權太。えゝ、放せと云ふのに……。

（權太はおすぎを突き放して行かうとする時、上の方の奥にてわや〳〵叫ぶ聲して、比企彌五郎と家來甲乙の二人走り出づ。）

彌五郎。（あとを見かへりながら。）熊が出た、熊が出た。

甲。乙。熊ぢや、熊ぢや。

彌五郎。油斷するな。

（彌五郎は太刀に手をかけて身がまへする。權太はおすぎを押遣れば、おすぎはあわてゝ納屋のかげに隱れる。上の方には又もやわや〳〵云ふ聲して、熊谷小郎直家は熊を追つて出づ。）

直家。這奴、手捕りにしてくれるぞ。

（直家は熊を手捕りにせんとて、兩手をひろげて立ち向へば、あとより古郡三郎は刺叉のやうなものを持つて追ひ來り、彌五郎も加勢して追ひまはせど、怒れる熊は自在に走りまはりて手に合はず。權太も走りかゝつて熊に組み付きしが、二三度揉みあひて跳ね倒さる。この時、上の方より一筋の矢がとび來りて、恰も人のやうに起ち上りたる熊の月の輪に立てば、熊は倒れて又起ち、やがて又倒る。上の方より熊谷次郎直實、疎野なる坂東武者、四十餘歳。家來三四人を連れて出づ。直實は弓矢を持ち、家來の一人は松明を持つ。）

直家。父上、お見事でござりました。

直實。これほどの大きい熊を手捕りにせうとは及ばぬことぢや。なぜ早く太刀を拔かぬ。大事の出陣を眼のまへに控へながら、獸を相手に立ち騒いで、怪我でもしたら何とするぞ。

（恐れ入つて。）はあ。

（上の方より河原佐太夫は松明を持ちて出づ。）

佐太夫。　たつた今その噂をしてゐたら、いたづら者めがもう出て來たか。（立寄つて熊の死骸を照しみる。）おゝ、これはなか〳〵大きな奴ぢやが、殿の一矢に月の輪を射られて、ころりと往生。やれ、やれ、可哀さうに……。（熊のかしらを撫でる。）

直實。　（笑ふ。）佐太夫は熊を友達のやうに思つてゐるな。

佐太夫。　いつも申す通り、いたづら者ではござりますが、又なんとなく可愛い奴でもございます。

直家。　おぢい樣の次郎太夫直貞殿は、まだ十六歳の小腕ながら、この里をあらしまはる大熊を唯一矢で射留められたので、諸人もその武勇に舌をまき、すぐに私の黨の旗がしらに押立てられたとか聞いてをります。それに比べると我々の未熟、まことに面目もない次第でございます。

直實。　むゝ、父上次郎太夫殿が、私の黨の旗がしらと立てられたは十六歳のときで、我がからだよりも大きい荒熊を仕留められたからぢや。むかしの人は矢はより強かつたなう。

（家來の一人が切株をよきところに直せば、直實は腰をかける、上の方より深谷又八走り出づ。）

又八。　殿、一大事でござります。

直家。　なんぢや。

又八。　その熊めがお厩へ這入りまして……。

權太。　え。

又八。　月毛の足を折りましてござります。

（權太はおどろき、無言にてあわたゞしく上の方へ走りゆく。彌五郎と家來甲乙もつゞいて走り去る。）

直家。　熊に傷めたられたのは月毛だけか。

又八。　葦毛にも西樓にも障りはござりませぬ。

直實。　月毛の傷はどうぢやな。

又八。　左の前足を折りましたれば、とてもお役には立つまいかと存じます。

佐太夫。　（熊を見て。）這奴、可愛いどころではない。飛んでもないいたづらをしたな。

直家。　出陣の矢先に月毛の足を折るとは、かへすゞ〳〵も憎い奴ぢや。

直實。　（舌打して。）えゝ、この場合になんといふことぢや。月毛を傷つけられては出陣がならぬわ。かうと知つたら今日にも打つ立つてしまふたものを……。佐殿おん旗揚げを聞いたのは今

直家。　月の初めで、源氏再興の時節到來と跳り上つて喜び勇んだのも束の間、つゞいて石橋山の敗軍に、佐殿のおゆくへ知れぬと聞いて、俄に力もぬけ果てゝしまふた。

直實。　父上ばかりではござらぬ。その時には我々も、高い山の頂上から急に谷底へ突落されたやうで、殘念無念を通り越して、たゞ夢のやうでござりました。

直家。　それがぢや。佐どのは恙なく安房から上總へお開きあつて、千葉の一黨を味方とせられ、東國の源氏に早速馳せ參ずるやうにとある。その御催促狀の到來したのは一昨日のことぢや。やれ、忝けない。これも源氏の運の強い證據ぢやと、再び舞ひまはつて喜んで、早速その用意に取りかゝつたが、なにを申すも長途の出陣と云ひ、都のぼりの晴軍ぢやで、なにや彼やの支度が二日や三日で埒あかず、心ばかりはあせりながらも、つい延び〳〵になつてしまふた。

直家。　それもどうやら整ひまして、いよ〳〵明後日の早朝には出陣といふ、その出先に大切の月毛をすたりものに致されては、どうすることもなりませぬ。お乘換への葦毛に障りのなかつたのは切てもの仕合せ。よんどころなければあれにお召しなされますか。

直實。　（頭をふる。）乘換へと云うても葦毛のやうな、あんな馬が何にならう。小鳥狩でもするならば知らず、東海道の長途を打つて上つて、一生に一度の晴軍をするといふに、あんな弱い駒では、とても、とても……。重鎧を着て蹈んまたがり、東西南北を十文字に駈けまはつたら、一日で乘り潰してしまふわ。

直家。　では、わたくしの西樓に召されましては……。

直實。　あの馬をおれに讓つて、おまへはどうする。

直家。　わたくしは葦毛に乘つてまゐります。

直實。　はて、判らぬ奴。あんな弱い駒では役に立たぬといふに……。いつも云うて聞かす通り、武士に取つて大切なのはその乘馬ぢや。いかに乘手が強くても、馬が弱くては何の働きもなるものでない。武士が弱い馬に乘つてゐるのは、盲が杖を持たぬも同じことぢや。（じれる。）あゝ、困つた。このいたづら者めに祟られて、大事の瀬戸際に何も彼も食ひ違うてしまふた。はて、なんとしたものかなう。

三郎。　それにつけても憎いはあの權太めでござります。お厩をあづかる役目を持ちながら、その番人を怠つたのは彼の不覺。屹と吟味を致さねばなりますまい。

佐太夫。　吟味せいでも大抵は判つてゐる。どうも困つたことになつた。この佐太夫も少しくかゝり

合ぢや。

直家。なに、佐太夫もかゝり合ぢやと……。仔細を云へ。

佐太夫。いや、年を取ると何うも思ひやりがあり過ぎて、却つて飛んだ間違ひを仕出來すものでござる。（熊を見る。）このいたづら者め。諸人に難儀をかけ居るな。

直家。えゝ、なにを云ふ。はつきりと仔細を申せ。

佐太夫。はあ。唯今申します。

（佐太夫は躊躇してゐる。上の方より彌五郎は權太を引つ立てゝ出づ。あとより家來甲乙もつゞく。權太はしほ〳〵とうづくまる。）

彌五郎。月毛は所詮お役には立ちませぬ。熊めに強く毆かれまして、膝を折つてしまひました。

（人々は更に顏を見あはせる。）

權太。（進み出づ。）殿樣、御成敗をねがひます。

（直實は無言でかんがへてゐる。）

權太。（また呼ぶ。）殿樣、一言の申譯もございませぬ。お厩をあづかつて居りながら、このやうな椿事を仕出しまして、重々恐れ入つてございます。よろしきやうに御成敗をねがひます。

直實。（見返りて睨るやうに。）馬鹿め。おのれを成敗したとて、あの馬が元にかへるか。

彌五郎。でも、權太奴をそのまゝには致されますまい。本人は已に覺悟してをります。

權太。どのやうな御成敗をうけましても、決してお恨みとは存じませぬ。

（納屋のかげよりおすぎ走り出づ。）

おすぎ。殿樣をはじめ、皆々樣にお願ひがございます。これは權太どのが惡いのではございませぬ。みんなわたくしが惡いのでございます。權太殿の身代りに、わたくしを御成敗なされてください。

直家。こゝらで見たやうな女子ぢやが、おのれは何者ぢや。

三郎。これはこゝらの百姓の娘でございます。これ、おすぎ。おのれは權太をさそひ出したな。

おすぎ。誘ひ出さうと來たところへ、あの納屋を破つてその熊が不意に出て來たのでございます。

又八。熊めがどうしてその納屋へ忍び込んだかなう。

彌五郎。なにかの食ひものをあさりに來たのであらう。

直實。えゝ、さうぐしい。そんなことを今更詮議してもあとの祭ぢや。（思案して。）これ、權太。

權太。はい。

直實。　おのれの命は助けてやる。唯今も申す通り、おのれを斬つても殺しても、傷いた馬が元へはかへらぬ。おのれの罪のつぐなひに、あの月毛に代るほどのよい馬を探してまゐれ。

權太。　はい、はい。

（權太はよろこぶ。おすぎもほつとする。）

直實。　近いところに秩父もあるが、あすこの馬は小さうて乘心がわるい。殊に畠山の領分ぢや。熊谷直實がいざ出陣の間際になつて、乘馬を探し廻つたなどと噂されては、武邊の嗜みが至らぬやうにも思はれて、近頃無念の儀ぢや。（人々を見渡す。）やはり奥州まで走らせねばなるまいかなう。

佐太夫。　道程は少し遠うござれど、奥州の三春か南部か、そこらまで參らねばなりますまい。あの月毛は三春でござりました。

直家。　（直實に。）わたくしの西樓は南部でござります。

直實。　さうぢや。どうでも馬は奥州がよい。では、權太。これからすぐに奥州へゆけ。

彌五郎。　（不滿らしく。）それまで出陣は延引でございますか。

三郎。　これから奥州まで往き戻りでは、いかに早くとも七日や十日はかゝりませう。

又八。　そのあひだには近所の者どもが皆くり出して、われ〳〵が後手になるのは殘念でなりませぬ。

彌五郎。　折角の着到に、われ〳〵が一番おくれたと申しては、熊谷の黨の名折れではござりませぬか。

直實。　その恥辱も無念もよく知つてゐるが……。（苛々するのを無理に堪へる。）いかに急いても狂うても、馬が無くてはどうにもならぬ。（急いて。）權太。早く行かぬか。

權太。　はい。では、すぐに行つてまゐります。

佐太夫。　これ、待て、待て。殿もお氣急きぢやが、おのれも慌てゝゐる。起つて行きかゝる。つて、その馬の代物をどうするのぢや。

權太。　おゝ。（氣がついて立ちどまる。）

直實。　なにさま然うぢや。（考へる。）出陣の用意で、たくはへの金も大方は遣ひ盡したところへ、降つて湧いたこの災難ぢや。奥州の牧でよい馬と申したら、この頃の價は何ほどであらうな。

權太。　世の諺にも千貫鹿毛と申すくらゐで、よい馬の價は錢で二三百貫、絹にいたしたら五十

匹以上でござりませうか。

直實、（眉をよせる。）佐太夫。右から左にそれだけの調達がならぬか。

佐太夫。さあ。何分お物入りのあとでござりますすれば……。（考へる。）錢は勿論、絹にいたしたところで何十匹とあつては、所詮すぐには集められませぬ。

直實。（いよ〳〵じれる。）では、どうすればよいのぢや。

直家。父上、かうなされては如何でござります。たとひ調達が出來ましてからが、澤山の錢や絹を持たせてやりましては、大勢の人を附けてやらねばならず、道中の日數もかゝりませう。いつそ御手もとにある砂金を持たせてお遣りなされては……。

直實。むゝ。それぢや、それぢや。よいところへ氣がついた。あの砂金は具足金として、陣中へ持參いたさうと存じてゐたが、もう斯うなつては惜んではゐられぬ。これ、權太。直實がたくはへの砂金は二百四十貫ある。それを持つて早くゆけ。

權太。かしこまりました。

直實。小次郎。革袋を持て。

直家。はあ。（上の方に去る。）

佐太夫。やれ、やれ、これで落付いた。これ。權太。おのれが不調法のつぐなひに、一生懸命でよいお馬を探してまゐれよ。おれも賴むぞ。

權太。勿論でござります。出羽奥州の隅々まで駈けまはつて、今までの月毛よりも屹とよいお馬を見つけ出してまゐります。

直實。なにを云ふにも火急の場合ぢや。奥州も南部は遠い。三春へゆけ。

權太。では、五日ほどお待ちくださりませ。

直實。五日……。それで確かに戻れるかな。

權太。夜もひるも駈け通して、屹と戻つてまゐります。

直實。おのれが受合へば、おれも安心して待つてゐるぞ。

權太。御安心くださりませ。

おすぎ。おゝ、これでわたくしも安心いたしました。殿樣、ありがたうございます。皆樣にもお禮を申します。

佐太夫。あゝ、もうよい、もうよい。

（佐太夫はあちらへ引込んでゐると眼で知らすれば、おすぎはあとに退る。上の方より直家は革袋

を持ちて出づ。）

直家。これでござりますな。

直實。さうぢや。權太にやれ。

（直家は革袋を權太に渡せば、權太は押しいたゞく。）

直實。その袋には砂金づつみが十二入れてある。云ふまでもないが、一包みが錢二十貫にあたるぞ。それで不足したら、あとから屆けると云へ。

（權太は袋より砂金包みを出してかぞへる。砂金は絹につゝみてあり。）

權太。たしかにおあづかり申しました。

（下の方より野口四郎、はゞきを着け、草鞋にて出づ。）

四郎。唯今戻りました。

直家。おゝ、待ちかねた。どうぢや、四郎。近郷の人々はいつ頃出陣と申してゐるな。

四郎。岡部六彌太は用意すでに整うて、明日の出陣と觸れ渡したさうでござりますが、いざとなれば何かと手間取れて、やはり明後日にならうかといふ噂でござります。

直實。これも明後日頃であらうと聞きました。

四郎。本庄はどうぢや。

直實。これは少しおくれるとか申して、しきりに用意をとり急いでゐるさうでござりますが、やはり一日遲ひぐらるゞ出陣かと存じられます。

四郎。いづれにしても、三日四日の中にはみな繰出すのか。誰にも彼にも先を越されて、父上、殘念でござりますな。

直家。（じれて叱る。）それを何遍云うても返らぬ。權太。ゆけ、ゆけ。

直實。はあ。

權太。（直實は床几を起つ。權太もいそいで起ちあがる。佐太夫は家來どもに指圖して、熊の死骸を片附けさせる。夜あらしの音、木の葉みだれて飛ぶ。）

幕

第二幕

（一）

奥州三春の馬市。舞臺一面の草原にて、少しく上の方に柳の大樹あり。正面にも下の方にも馬をつなぐ立木五六本あり。遠き正面には安達太郎山みゆ。

（九月下旬の晴れたる日。正面の立木に五六匹の裸馬がつないである。下の方の立木にも、四五匹の裸馬が繋いである。それらの馬のそばに博勞四人が或は立ち、或はしやがんでゐる。念佛杢右衛門は世話方にて、四十餘歳の大坊主、頸には大いなる珠數をかけて、竹の鞭を腰にさし、柳の大樹の根に腰をかけて帳面をつけてゐる。土の上には硯が置いてある。九郎作と茲吉はおなじく世話方にて、竹の鞭を持ちて立つ。仁助は馬主にて博勞に一匹の馬をひかせ、半六も馬主にて自分の馬の口を取つてゐる。馬の買手土太郎と五市はこの二人を相手に論判してゐる。ほかに買手七八人がうしろに立つて見物して居る。薄く水の音、小鳥の囀ぐる聲きこゆ。）

土太郎。これ、おれを盲馬とはなんのことだ。

仁　助。（怒鳴る。）おゝ、盲でねえか。（わが馬を指す。）これ、よく見ろよ。この馬を十貫の二十貫の、盲値段に踏み倒すにも程があるぞ。おめへ達は馬の相場と云ふものが判らねえのだ。

五　市。なんの、判らねえことがあるものか。そんな野つ兒は十貫か二十貫か關の山だ。

半　六。それだから盲だといふのだ。これ、よく見るがいゝ。この馬は泥や木でこしらへたのでねえ。豆も食へば、草も食つて、生きてぴん〳〵跳ねまはつてゐるのだぞ。

博　勞。唐天竺の市へ行つたからと云つて、これほどの馬を十貫や二十貫で賣る國があるものか、ばか〳〵しい。

土太郎。もと〳〵賣物買物だ。忌なら賣らねえまでのことよ。

五　市。そんなに文句をいふことはねえ。このうはゞみ野郎、初めから人を呑んでかゝるのか。

仁　助。なにを云やあがる。この野良狐め。貴樣達を乘せるやうな馬はこゝらに賣つてゐねえぞ。

半　六。違えねえ。狐を馬に乘せるとはこの事だ。

土太郎。なにが狐だ。

仁　助。なにがうはゞみだ。

（双方喧り立つて詰めよるを、九郎作と甚吉は立ちよつて鞭にて隔てる。）

甚吉。　まあ、待て、待て。（仁助等に。）おまへ達は無暗に氣が強くてならねえだ。一體こゝへ馬を賣りに來たのか、喧嘩を賣りに來たのか。それを考へたらもう些とおとなしく相談が出來る筈だ。

仁助。　こんな判らずやを相手にして、おとなしく相談してゐたら日が暮れるでねえか。おれ達は登り下りで七里の山坂を越えて來てゐるのだ。

土太郎。　七里でも八里でも百里でも、それをおれが知つたことか。

九郎作。　（土太郎に。）これ、おまへ達も氣が短かすぎるぞ。今もおまへの云ふ通り、市は賣物買物だ。つまり兩方が賣つて好し、買つてよしと云ふところで、取引が出來る。なんでもおとなしく相談をすることだ。

仁助。　その相談が出來ねえから云つてゐるのだ。

半六。　さうだ。さうだ。

九郎作。　（制しながら。）まあ、待てと云ふのに……。どうも困るな。（李右衛門に。）おい、おい、李右衛門どん。帳面の方は好加減にして、なんとかこのじや〳〵馬を取鎮めてくれねえのか。

李右。　はゝ、じや〳〵馬にはいつも困らせられるな。（笑ひながら起つてくる。）これ、仁助も半六も大概にしろ、買手があつての馬市だ。買手と名のつく以上は、狐でも狸でも貉でもみんなお客樣でねえか。賣買の値段はめい〳〵の料簡次第で、やすければ賣らねえまでのことだ。

五市。　それをおれ達も云つてゐるのだ。

李右。　まあ、判つた。判つた。（仁助等に。）つまりが然ういふ理窟だから、おたがひに靜に掛合つてくれ。馬でも人間でも口強はどうもいけねえ。仁助は男やもめで、半六は嫁取前で、どつちも阿魔つ子を探してゐる身の上でねえか。そんなじや〳〵馬では、とても連れ添つてくれる牝馬はあるめえぞ。嗜め、たしなめ。（九郎作と甚吉に。）こゝでいつまでも嚙み合はして置いては埒があかねえ。一匹づつそつちへ連れて行つて、おまへ達が中に立つて、うまく話をまとめてやれよ。

九郎作。　では、半六。おまへはこの人と一緒に來い。

甚助。　仁助もその人とこつちへ來てくれ。

（九郎作は五市と半六をつれて、上の方の奥に去る。甚吉は土太郎と仁助を連れて、下の方の奥に去る。博勞もつゞいてゆく。この爭ひを見物してゐた買手も思ひ〳〵に左右へ分れて、そこに繫

いである駒を見廻つてゐる。）

博勞一。（李右衛門に辭をかける。）世話方はいつも骨が折れるね。

李　右。氣のあらい手合があつまるのだから、馬市に喧嘩は附物だが、取分けてこの頃は賣手も買手も口强馬で、跳ねるわ、喚ひつくわ。どうにも手綱の取りやうがねえ。

博勞二。それでもこゝの市には李右衛門どんが頑張つてゐるので、よそから見ると人氣が大變に穩かだといふことだ。

李　右。おれも若い時にはよく喧嘩をしたものよ。だん〳〵に年を取つて來たのと、もう一つには、いつぞや有難い和尙樣のお說敎を聽かされてから、かうして生きた馬を年中追ひまはしてゐる商賣も、罪の深いものだとつく〴〵悟つたが、さりとて商賣を止めるわけにもゆかねえから、この通りに頭を丸めて珠數をかけてゐる。これで些とは氣が休まるといふものだ。如是畜生發菩提心。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

博勞三。それで氣が休まれば何よりだ。おれも頭を剃りこぼつてお念佛でも唱へて見るかな。

博勞四。違えねえ。それがまつたく鬼の念佛だ。はゝゝゝゝゝ。

一　同。はゝゝゝゝゝ。

（この間に、馬を見てゐたる買手は思ひ〳〵に上下へ分れて去る。上の方の奥よりおきちは若き女馬士にて一匹の馬をひき、買手甲と連れ立ちて出で、李右衛門のまへに來る。）

おきち。（會釋して。）世話方さん。わたしの値がきまりました。

李　右。おゝ、きまつたか。それはよかつた。おやぢも喜ぶだらう。（買手に。）して、買手のおまへの名は……。（帳面をひろげる。）

買手甲。はあ。蒲の倉村の傳五右衛門と云ひます。

李　右。むゝ。蒲の倉村……。（帳面につけてゐる。）

（つゞいて上の方より馬主清藏は二匹の馬をひき、買手乙と連立ちて出づ。）

清　藏。もし、世話方さん。わしのも賴みます。二匹とも賣れましたよ。

買手乙。わしは大善寺村の德次郎と云ひます。

李　右。（帳面につけながら。）まあ、待つてくれ。さう一度に云はれては帳面が間違つてしまふぞ。（帳面につけ終りて。）さあ、よい、よい。これでおきちッ兒の分は濟んだ。

おきち。あい、あい。ありがたうございます。

博勞一。これ、おきち。色男が待つてゐるぞ。道草をくはずに早く歸れよ。